

聖徒の道

11
1993



末日聖徒
イエス・キリスト
教会

聖徒の道

1993年11月号



表紙——ソルトレーク神殿は100年前の1893年に献堂された。今月号の「聖徒の道」には、同神殿のさまざまな特集記事が掲載されている。(表紙写真/クレイグ・ダイヤモンド撮影。裏表紙写真/神殿の装飾部分、ウェルデン・アンダーソン撮影。建設中の神殿、教会記録保管所の許可を得て掲載)

こどものページ——ベリーズのベリーズシティに住むズイーニア・ムーニョスは、日曜日の夜を、せん教しに手紙を書いてすごしています。14ページの「友だちになろう」にのっています。(写真さつえい/マービン・K・ガードナー)

一般

大管長会メッセージ——ソルトレーク神殿

第一副管長ゴードン・B・ヒンクレー 2

どの窓、どの尖塔も神の思いを伝えぬものなし

リチャード・ナイツェル・ホルザップフェル 8

アピラ兄弟の信仰 ホセ・オヘダ 26

祝福をもたらす神殿参入 フランシス・W・ホジソン 32

主の聖き宮居 ジェイ・M・タッド 34

「神のみ方がともにありました」 ラリーン・ガント 44

定期特別記事

読者からの便り 1

家庭訪問メッセージ——

耳を傾け、信頼し合うことにより、姉妹のきずなを強める 25

こども

ハロルド・B・リー ケリー・リックス・アダムズ 2

神でんは敬けんな所です キャスリン・A・ファイフィールド 4

分かち合いの時間——知えのことば ジュディ・エドワーズ 8

スミス兄弟の「アーメン」 ブラッド・ウィルコックス 10

おもちゃばこ 13

友だちになろう——

ベリーズのベリーズシティに住むズイーニア・ムーニョス

マービン・K・ガードナー 14

聖徒の道

1993年11月号

本誌は、末日聖徒イエス・キリスト教会の公式刊行物です。本誌は以下の言語で出版されています。月刊——イタリア語、英語、オランダ語、サモア語、スウェーデン語、スペイン語、中国語、韓国語、デンマーク語、ドイツ語、トンガ語、日本語、フィンランド語、フランス語、ポルトガル語、ノルウェー語。隔月刊——インドネシア語、タイ語、タヒチ語。季刊——チェコ語、ハンガリー語、アイスランド語、ロシア語。

大管長会：エズラ・タフト・ベンソン、ゴードン・B・ヒンクレー、トーマス・S・モンソン
十二使徒定員会：ハワード・W・ハンター、ボイド・K・バックナー、マービン・J・アシントン、L・トム・ベリー、デビッド・B・ヘイト、ジェームズ・E・ファウスト、ニール・A・マックスウェル、ラッセル・M・ネルソン、ダリン・H・オックス、M・ラッセル・バラード、ジョセフ・B・ワースリン、リチャード・G・スコット

顧問：レックス・D・ピネガー、ジョン・H・グローバーク、V・ダラス・メリル、ロバート・E・ウエルズ

編集長：レックス・D・ピネガー
教科課程管理部実務部長：ロナルド・L・ナイトン
教会機関誌ディレクター：トーマス・L・ピーターソン

国際機関誌

編集主幹：ブライアン・K・ケリー

編集主幹補佐：マービン・K・ガードナー

編集副主幹：デビッド・ミッチェル

編集補佐/こどものページ：ディエーン・

ウォーカー

工程管理：トム・フォーセット、メアリーアン・マーティンデール

チーフアートディレクター：M・M・カワサキ

アートディレクター：スコット・バン・カンペン

デザイナー：シェリー・クック

制作：レジナルド・J・クリステンセン、ジェニファー・ダットワイラー、ジェーン・アン・ケンプ、デニス・カービー

配送部長：ジョイス・ハンセン

聖徒の道 1993年11月号第37巻第11号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会

〒106 東京都港区南麻布5-10-30

電話 03-3440-2351

印刷所 株式会社 精興社/クロスロード

定価 年間予約/海外予約2,200円(送料共)

半年予約 1,100円(送料共)

普通号 150円、大会号 350円

Copyright © 1993 by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved. Printed in Japan. 英語版承認—1991年10月 翻訳承認—1991年10月 原題—International Magazines November 1993. Japanese. 93990300.
●定期購読は、「聖徒の道予約申し込み用紙」でお申し込みになるか、または現金書留か郵便振替(口座名/末日聖徒イエス・キリスト教会 振替口座番号/東京0-41512)にて管理本部経理課へご送金いただければ、直接郵送いたします。●「聖徒の道」のお申し込み先…〒106東京都港区南麻布5-10-30管理本部経理課 ☎03-3440-2351(代表) ●「聖徒の道」の配送についてのお問い合わせ…〒213川崎市高津区溝の口131/末日聖徒イエス・キリスト教会 資材管理部配送センター ☎044-811-0417

The Seito No Michi (ISSN 0385-7670) is published monthly by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 50 East North Temple, Salt Lake City, Utah 84150. Second-class postage paid at Salt Lake City, UT 84150. Subscription price \$14.00 a year, \$1.50 per single copy. Thirty days' notice required for change of address. When ordering a change, include address label from a recent issue; changes cannot be made unless both the old address and the new are included. Send U.S.A. and Canadian subscriptions and queries to Church Magazines, 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, U.S.A. Subscription information telephone number 801-240-2947.

POSTMASTER: Send address changes to Seito No Michi at 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, U.S.A.

読者からの便り

すばらしい模範

教会員となって、私たちの霊的成長に役立つよう準備されたプログラムを利用できることは、大きな祝福です。「リアホナ」(スペイン語版)は、生活に指針を与えてくれるだけでなく、私たちが世界じゅうの末日聖徒と考え方や思いのうえでひとつになれる方法を提供してくれていると思います。

掲載されている経験のどれを読んでも、天父と御子イエス・キリストの愛が感じられます。私の家族は特に「セシール・ペルー インドでの愛と友情」(「聖徒の道」1992年3月号、pp. 8-15)という記事に感動しました。私たち皆にとって本当にすばらしい奉仕の模範です。彼女について紹介してくださいましたことに感謝しています。

エルサルバドル

サン・ミゲルステーキ部

ガヴィディアワード部

ホルヘ・アヤラ・ラミレス

困難な時代の大きな助け

以前は、教会の機関誌を欠かさず読んでいたわけではなかったのですが、今では「オ・レ・リアホナ」(サモア語版)を読む習慣が身につきました。それは大きな楽しみとなりました。

大管長会をはじめとする教会幹部のメッセージから学ぶことがたくさんあります。彼らの勧告は、この困難な時代に生きる私たち若人にとって、大きな助けとなっています。

私は教会歴史について、特に太平洋地域の聖徒たちについて書かれた記事を読むのが好きです。

考えてみると、「オ・レ・リアホナ」は私の生活の中でとても大切な位置を占めています。

ニュージーランド

オークランド・マヌレバステーキ部

アレマワード部

スイサーミ・ルアトゥア

喜びと感謝

「ノルドシュテルナン」(スウェーデン語版「北極星」の意)に心からの喜びと感謝を感じています。実に優れた機関誌だと思います。毎月、掲載される記事をはじめ、美しい挿絵やカラー写真、こどものページ、そして表紙を楽しみにしています。

私は、「ノルドシュテルナン」は、毎月私に与えられる月刊の聖典のようなものだと考えています。1951年から1973年までの分は製本した状態で、また、それ以降のものも、特別なファイルに入れて保管してあります。

この機関誌はまた、すばらしい伝道の道具でもあります。私はよく旅行に行くときに2、3冊持参し、友人やほかの旅行者に紹介できるようにしています。

このようなすばらしい機関誌が発行されていることに感謝しています。

スウェーデン

イエーデボルイステーキ部

ジェンケピングワード部

グナール・ニールソン

読む喜び

私にとって「リアホナ」(スペイン語版)を読むことは喜びです。今まで大管長会メッセージや聖徒たちの証を読んで、たくさんの祝福を受けてきました。記事を読んで、回復されたイエス・キリストの福音が人々の生活に影響を与えていることを知るたびに、信仰と希望で胸がいっぱいになります。

私と家族にとって、この機関誌はモルモン経やほかの標準聖典と切り離して考えることのできないものになっています。

プエルトリコ、グアヤマ

アイーダ・ポモレス

ソルトレーク神殿

第一副管長

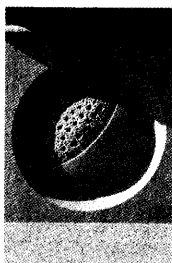
ゴードン・B・ヒンクレー

「天と地とその中のすべてのものをお造りになった、……最も光栄高き天にいらっしゃる父なる神よ。あなた様の子供である私たちは、きょうこの日にみ前に進み出、最も聖なるみ名において建てたこの宮居の中で、あなた様の独り子の贖いの血により、私たちの罪がこれより先とこしえに赦され、私たちの祈りがあなた様のみもとに届き、あなた様の玉座に速やかに至って、その聖なる住まいにおいて聞き届けられますようお願いいたします。私たちの願いが聞き届けられ、あなた様の無限の知恵と愛とによりて、こたえられますように。また私たちが純粋な心と、あなた様のみこころを行ない、そのみ名を賛美する心からの目的で求めるかぎり、私たちの求める祝福が与えられ、さらにはその100倍もの祝福が与えられますようお願いいたします。」¹

1893年4月6日のソルトレーク神殿の献堂に際して、ウイルフォード・ウッドラフ大管長は、このような言葉で祈りを始めました。壮麗な献堂の祈りの中でも、この部分はそれ自体でひとつの説教となっています。長く美しい祈りの、この最初の部分を聞いただけでも、当時の予言者が、天地の造り主としての神の存在を認め、神が私たちの御父であるとはっきり認識していたこと、そして、祈りを通して神に語りかける神の息子娘たちには、ひとり残らず祝福が授けられるのを知っていたことがわかります。また、神の独り子は世の救い主であり贖い主であり、その贖いの血は私たち一人一人のために流されたことも予言者は熟知していたようです。予言者はさらに、私たちが全能の神からの祝福をい



ソルトレーク神殿の
献堂の祈りを捧げた
ウイルフォード・ウッドラフ
大管長は、
神殿の儀式の重要性について
明確に教えた。



この建物に使用された石の多くは、職人にきわめて高度な技術がなければ、加工できないようなものばかりだった。写真の石からもそれがうかがえる。それぞれ、星、月、雲がかたどられている。

ただくにふさわしく、また神のみ名をあがめる心からの望みを持って、歩めるよう、神に助けを求めています。

この奉獻の祈りは、主がその民に賜った祝福に対する感謝の心にも満ちています。この献堂の式典は、ソルトレーク盆地に住む末日聖徒の歴史上、最大であるとともに最も重要な出来事でした。

注目すべきことは、1847年に開拓者が入植した4日後に、神殿の敷地を示す目印のくいを打ったのが、ほかならぬこのウィルフォード・ウッドラフだったということです。この時、ブリガム・ヤング大管長は、「ここに我々は神殿を建て、神に捧げよう」と言ったと伝えられています。

ウッドラフ兄弟は、40年にわたるこの壮大な主の宮居の建築の一部始終を、自分自身の目で見ました。そして、神殿が献堂された時、ウッドラフ兄弟は86歳になっていました。その4年前に大管長としての支持を受けていた彼は、それまでに建築された末日の神殿、すなわちカートランド神殿、ノーヴー神殿、セントジョージ神殿、マントイ神殿についても、熟知していました。中でも、セントジョージ神殿で、献堂された1877年から1884年まで、神殿長を務めています。

神殿が建築される目的について、ウッドラフ兄弟以上に深く理解していた人は、ほとんどいませんでした。彼は、主の宮居で行なわれる儀式の重要性について、情熱

をもって理解し、誤解の余地なく明確に教えました。とりわけ、死者のために身代わりの儀式を行なうことの必要性和、偉大な族長制度の下で家族が固く結び合わされるための方法については、力を込めて説きました。

ウッドラフ大管長が献堂式に際して捧げた祈りは、実に美しい祈りです。当時、この神殿は教会で最も新しい神殿でした。今でもなお、教会最大の神殿です。

どの神殿で行なわれているみ業も、同一のものであり、等しい効力があります。ソルトレーク神殿がアメリカ合衆国西部でそのみ業を開始した時、教会には、すでに完成し、献堂されている神殿が3つありました。しかし、ソルトレーク神殿は一番よく知られており、1世紀もの間、教会の数々の出版物の表紙を飾ってきました。今では、末日聖徒の間だけでなく、教会員でない世界じゅうの人々の間にも、このソルトレーク神殿は、広く知れわたっています。

個人的な話をさせていただければ、私の生涯におけるかけがえのない祝福のひとつは、このソルトレーク神殿であると言えます。もちろんこれは私の神殿ではありません。主の神殿です。しかし、それでも、私はこの神殿がある意味では自分の神殿に思えてなりません。

自分の神殿のようにいつでも見上げることができ、参入できるからです。神殿を外側から賛美するに当たっては、何ら資格を必要としません。しかし、神殿に参入する者には、一定の標準が求められています。

神殿は美の傑作です。また、

力の象徴、
平和の家、
奉仕の聖域、
学びや、
啓示の場、
真理の泉、
誓約の家、
神の宮居でもあります。

幸いなことに私は、この建造物の美しさを、ほとんど毎日のように堪能できる機会に恵まれています。また、資格あるすべての教会員と同じように、神殿内の部屋に入り、その廊下を歩く祝福に恵まれています。私にとつ

ては、かけがえのない建造物なのです。

ソルトレーク神殿の比類ない美しさを否定できる人がいるでしょうか。この建物は、伝統的な建築様式には一切従っていません。また、40年にわたって建築が続けられましたが、その期間中、細部にあつては多くの箇所に変更が加えられたことでしょう。しかし、それにもかかわらずこの建物は見事に調和しています。大地の中にしっかりと基礎が打ち込まれ、天空に向かってそびえ立っています。そして、設計上、厳密に左右対称が守られています。最上部からは、主尖塔が6本そびえ立ち、それぞれの主尖塔には、小尖塔が4本ずつ3層にわたって重ねられています。

この神殿は、こうした外観のため、それぞれの塔が独立して地から天に向かってそびえ立っているように見えます。しかし同時に、それらが結合されて、調和と一致を造り出しているようにも見えます。この6本の尖塔をまとめているのが、鋸壁きよへきです。かこう岩の歯状装飾とかさ石は、デザインの美しさに花を添えています。

さまざまな形の窓も、興味深いもののひとつです。円形の窓、楕円形の窓、あるいは上部がアーチ型になっている窓があり、また、細長く縦に伸びている窓もあります。

私は建築家の立場でこの文を書いているのではありません。むしろ、どの位置から見ても見事に調和のとれた外観と、その装飾の美しさを愛する者のひとりとしてこの文を書いているのです。

建築家たちの業績には目を見張るものがあります。彼らは、現在の建築の専門家のような、この種の技術的な訓練を受ける機会にはほとんど恵まれなかったはずですが、ガラス製品と一部の金物類を除いては、みな地元産の材料を使用しました。この建築家たちは、天から導きを受けていたに違いないのです。彼らは、自分たちがどこにでもあるような建物を建てているのではないことをよく承知していました。自分たちが、神の宮居を建てているのだという自覚があったのです。

かこう岩の外壁は、堅固さと強さを感じさせます。かこう岩を切り出し、磨きをかけ、積み上げていった人々は、そのほとんどがイギリスで技術を習得していた人々でした。彼らは改宗者としてユタへやって来ていたので

す。彼らは高度な技術を習得していました。1世紀を経た今でも、この神殿がそれを証明しています。

当時、石工の監督として働いていたジェームズ・モイルは、次のように書き残しています。

「石の中には研磨を完了させるのに、数日どころか、数週間かかるものさえあった。……この建物に使用される石の多くは、職人にきわめて高度な技術がなければ、加工できないようなものばかりだった。というのも、こうした石はそのほとんどが最終段階で微細な装飾を必要とするものだったからである。地上から大きな丸い窓に目を凝らせば、そこに刻まれたこれらの装飾が見てとれるだろう。その石材は、余計な衝撃を与えると、かこう岩に含まれる石英や長石や雲母の小片が落ちて、すぐに欠けてしまうものであった。そのため、微細装飾の加工部分は常に最後まで残されることになった。もし間違つてハンマーを打ちつけたり、力を入れすぎたりすると、それまでの作業はまったく水泡に帰してしまい、そのために、作業が数週間も遅れるかもしれないのだ。」² この神聖な建造物の材料である巨大なかこう岩は、強さと堅固さを持つと同時に、繊細さも持ち合わせていたのです。

神殿が完成した時、周囲に外壁が設けられました。それがテンプルスクウェアとして知られるようになったのです。今ではその外壁の外側は、交通量も増え、騒音の生じることも多くなりましたが、壁の内側には、平安と美に包まれた環境があります。優雅な歩道、広々とした芝生の中庭、美しい樹木、色とりどりの花々。そうしたものが、この敷地を外部の様子とはまったく違った世界にしているのです。今では、ユタ州の内外から年間に百万人以上もの観光客が訪れるようになりましたが、彼らもこのようなテンプルスクウェアの美しさを、異口同音にたたえています。

神殿の内部では、さらに深い平安を経験することができます。この世の喧噪や慌ただしさから隔たつて、主の宮居の中は、静けさに包まれているのです。神殿の中で奉仕をする人々は、自分たちが永遠の事柄に携わっているのだということをよく承知しています。全員が白い衣服に身を包み、話す言葉も穏やかで、気高い思いに満たされています。

神殿は誓約の家である。その中で私たちは、全力を尽くしてイエス・キリストの福音に沿った生活をするということを、厳かに、また神聖な思いで約束する。

ここは奉仕の聖域です。この神聖な宮居の中で行なわれるみ業の大部分は、すでに死のとばりのかなたへ行ってしまう人々のために身代わりで執行されるものです。私はこのみ業に比肩できる業をほかに知りません。神の御子は、全人類のために身代わりの犠牲となりました。死者のためのみ業は、私の知っているほかのどの業にも勝って、この主の犠牲に近いみ業なのです。すでにとばりのかなたにいる人々がこの神聖な奉仕から恩恵を受けたとしても、私たちは感謝の言葉を期待できないでしょう。このみ業は、今生きている人々が、すでに亡くなった人々のために行なう奉仕であり、自己を捨てるという点では、いわば奉仕の真髄とも言える活動なのです。

この神聖な建物は、神にかかわる崇高で神聖なことを学習する学びやともなります。ここでは、愛に満ちた御父が、時代を問わずその息子娘のために定めてくださった計画について、その概略を学びます。また、前世からこの世の生涯を経て次の世に至る、人の永遠の旅路について、その壮大な行程が示されます。根底となる偉大な基本的真理が、それを聞くだれにでも理解できるよう、明確にまた簡潔に教えられます。

ここは啓示の場でもあります。献堂以来、ほぼ毎週のように、大管長会と十二使徒評議員会はここで会合を持ってきました。そこでは、光明と理解力が天から注がれることを切に願って、心からの祈りが捧げられています。また、清い雰囲気の中、静かで穏やかな話し合いが進められます。ここは、永遠の神権にかかわる最高の権能を授けられている人々が、ともに話し合い、主のみこころを伺って、靈感を受ける場でもあります。

1978年6月のある日、スペンサー・W・キンボール大管長が、きわめて大きな影響を及ぼすであろう事柄について、主に導きを求めて祈りを捧げた時、私はあの聖なる部屋の中で同じ祈りの輪に加わっていました。その結果、ふさわしいすべての男性に神権が授けられるようになったのでした。

以前にも証したように、私は今でも、あの祈りの時には確かに啓示のみたまを感じる事ができたと証できます。そして、あの啓示からもたらされた実は、世界じゅうの非常に多くの人々にとって、麗しくすばらしいもの

でした。

神殿はまた、個人的な啓示や靈感を受ける場所でもあります。苦しんでいるとき、むずかしい判断を下さなければならなくなったとき、あるいはまた、複雑な問題を処理しなければならなくなったとき、これまで実に多くの人々が天からの導きを求めて、祈りと断食の精神で神殿に参入してきました。その結果、天からの声を直接聞くことがなくとも、進むべき方向についてその時強く心に感ずるものがあり、やがて時が過ぎてそれが祈りに対する答えだとわかった、と証している人々はおおぜいいます。

この神殿は永遠の真理の泉です。「わたしが与える水を飲む者は、いつまでも、かわくことが〔ない。〕」(ヨハネ4:14)ここでは、いと高き所からもたらされる神聖な真理が、そして、深遠な意味を持つ永遠の真理が教えられます。

この建物の中に入る人々にとって、この宮居は誓約の家となります。ここで私たちは、全力を尽くしてイエス・キリストの福音に沿った生活をするを、厳かに、また神聖な思いで約束します。また、真実の宗教の礎であるそうした原則に従って生活をするを、永遠の父なる神と誓約するのです。

ここは神の家です。神殿の外壁には、「^{きよ}きを主に捧ぐ——主の宮居」という銘が刻まれています。前半の言葉は、全能の神がおられることを高らかに宣言しているとともに、神のみ前に神聖で敬虔な思いでいたいという願いを表わしています。後半の言葉は、この建物の所有者を表わしています。この建物は主の家です。主の民の献身的な奉仕によって建てられ、愛と犠牲の供え物として主に捧げられたものなのです。

この神聖な宮居の中で、青年であった私は伝道に出発するに先立ってエンダウメントを受けました。やがて、聖なる神権の権能の下に結婚し、死によって分かたれることも時間とともに色あせることもない関係に結び固められたのも、この神殿の中ででした。私は常にこの神殿が建てられた目的を達成するために参入し、神殿を出るときには入るときよりも良い人間となっていたいと努めてきました。

同じように、数え切れないほどの人々がこの神殿に参



入し、世の贖い主の神聖な愛を感じてきました。

教会の神殿はそれぞれ、建築設計上、多少の違いはありますが、どの神殿でもそこで与えられる祝福は同じです。今ここで特にソルトレーク神殿だけを取り上げて語っていますが、それはこの神殿が神の予言者によって献堂されてから、ちょうど1世紀たつからです。その建築に要した時間は、ほかのどの神殿よりも長く、40年もかかりました。また、延床面積や設備の点でも、私たち末日聖徒が建てた神殿の中では今もって最大規模のものなのです。

これは紛れもなくイザヤの次の予言の成就です。

「終りの日に次のことが起る。主の家の山は、もろもろの山のかしらとして堅く立ち、もろもろの峰よりも高くそびえ、すべての国はこれに流れてき、

多くの民は来て言う、『さあ、われわれは主の山に登り、ヤコブの神の家へ行こう。彼はその道をわれわれに教えられる、われわれはその道に歩もう』と。」(イザヤ 2：2-3)

聖なる宮居を与えてくださった神に感謝します。願わくば、この宮居が、これまで固く立っていたように、これから先、福千年の間も固く立ち続け、私たちの御父の

子供である、生者と死者双方の必要を満たし続けますように。また、その門から入ろうとする忠実な人々に常にその扉が開かれ、天との交わりを経験することができますように願っています。□

話し合いのための提案

1. 1世紀前に行なわれたソルトレーク神殿の献堂は、ソルトレーク盆地に住む末日聖徒の歴史上、最大かつ最も重要な出来事であった。
2. ソルトレーク神殿は、世界じゅうの人々によく知られている。
3. ソルトレーク神殿は、ほかのあらゆる主の神殿と同様に、美の傑作であり、力の象徴、平和の家、奉仕の聖域、学びや、啓示の場、真理の泉、誓約の家、そして神の宮居である。

注—

1. ウイルフォード・ウッドラフ「デゼルト・イブニング・ニューズ」1893年4月6日付、p.5より引用
2. ゴードン・B・ヒンクレイ「ジェームズ・ヘンリー・モイル」p.80

どの窓、どの尖塔も

神の思いを伝えぬものなし

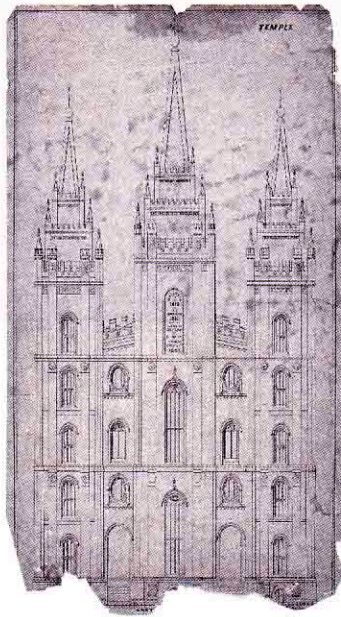
40年の歳月を費やして
ついに奉獻されたソルトレーク神殿は、
2,600年前の予言を成就した。

リチャード・ナイツェル・
ホルザップフェル

1853年2月14日。この日、ソルトレーク神殿の鋳入れ式に参加したひとりの末日聖徒はこう書き残しました。「足に靴代わりのボロを巻きつけ、凍った泥とぬかるみの中を歩いて出かけた。」「妻の薄いタータンチェック地のスカートで作ったズボンをはき、これも薄手の更紗のシャツに、麦わら帽子といういでたち。これしか着る物が無いのである。この格好がいやなら、家にいるしかない。……貧しいのは私ばかりではないのだ。……同じように貧しい境遇の者はおおぜいいた。」この聖徒は、午前11時に予定されていた式典のために早朝から参集した数千人の中の、ひとりでした。

温かい足のままでいられる家の中から神殿建設予定地まで、この人を引き寄せたものは一体何だったのでしょうか。当時この山間のシオンに来てまだ5年もたたず、飢え苦しむ聖徒たちにとって、神殿はどのような力を持っていたのでしょうか。

聖徒たちは密接に関連する3つの概念を理解していたからこそ、いてつくぬかるみに凍える足で立っていても、まだ建っていない神殿の尖塔を心に描く信仰を持つことができたのです。



1854年神殿設計技師トル
ーマン・O・エンジェルの描いた神殿正面図。

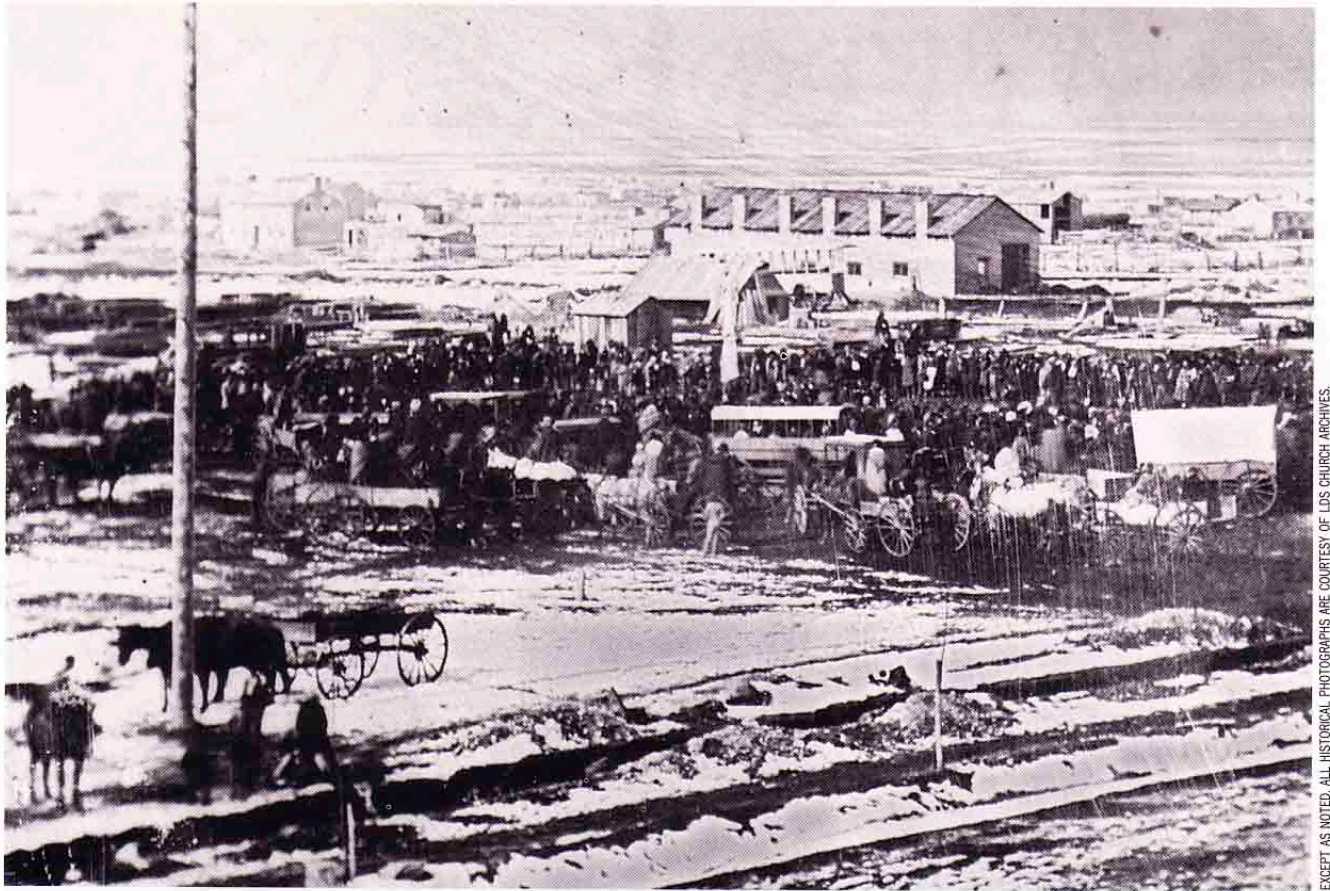
その第1の概念は、「集合」すなわち「バビロン」からの脱出の目的は、神殿の建設にほかならないという、予言者ジョセフ・スミスの教えです。「神は、主の宮居を建てるために、末日に民を集められる」のです。（「予言者ジョセフ・スミスの教え」p. 308）これで、「多くの民は来て言う、『さあ、われわれは主の山に登り、ヤコブの神の家へ行こう』（イザヤ2：3）という昔の予言が成就します。さらにジョセフ・スミスは、神殿は「主が民に、主の宮居の儀式と主の王国の栄光を現わされ、救いに至る道を教えられる場所」（同、p. 308）であると述べています。

第2に、主は忠実な聖徒は「天よりの能力を授け」られる（教義と聖約38：32）と約束していらっしゃいました。誓約を交わす儀式を通してのみ、この霊的な祝福が注がれ、聖徒と神を結ぶことができるのです。

誓約を通して、ほかのどのような方法でも得られない霊の力が現われるのです。（教義と聖約84：19—22参照）

第3に、聖徒たちは主が自由意志を尊重していらっしゃるのを知っていました。その上で、犠牲を払うことを選択したのです。「信仰講話」第6講は、「すべてを犠牲にすることを求めない宗教は、命と救いをもたらすに足





EXCEPT AS NOTED, ALL HISTORICAL PHOTOGRAPHS ARE COURTESY OF LDS CHURCH ARCHIVES.

る信仰を生み出す力を持ち得ない」と教えています。

「ここが神殿の場所だ」

聖徒たちは神殿で受けた教えを胸に秘めてノーヴーを後にしました。1847年、ソルトレーク渓谷にたどり着くまでの2,400キロの旅を終えてわずか4日後、ブリガム・ヤングはシティークリークのふたつの支流に挟まれた場所に歩いて行き、手を振りながら「ここが神殿の場所だ」と宣言しました。これを聞いてウイルフォード・ウッドラフが目印のくいをその場所に打ち込みました。言い伝えによると、神殿が完成した時、その場所が神殿の中心になったといえます。

1853年2月の寒気の中、ショールや外套がいとうをまとって集會に集った開拓者たちに、ブリガム・ヤングはこう回想しました。「これまで私は、啓示や示現についてあまり多くを語ってきませんでしたが、去年の7月からさかのぼって5年前のこと、霊の眼で神殿を見たときだけ申し上げておきます。……どのような神殿を建てるべきか主まなこに尋ねたことはありません。なぜでしょう。それは、すでに示されていたからです。神殿の建つべき場所も、実際に見たことがなくてもはっきりわかりました。まるで現実に目にしているかのように明らかでした。」

1853年2月14日ソルトレーク神殿の鋤入れ式の写真。撮影した開拓者の氏名不詳。

ウイルフォード・ウッドラフによると、ブリガム・ヤング大管長の説教は「30分ほどの非常に胸躍る説教」で「大会衆のどこにいても明瞭めいりょうに聞こえた」といいます。ブリガム・ヤングは次のように説教を始めました。喜びを抑え切れない様子が手に取るようにわかります。「今我々は、これまでで、そして将来にわたっても、地球が現在の構成を保ち、同じ目的の中にあるかぎり、人の子の中で起こり得る最も厳粛で、興味深く、喜びに満ちた栄光の場面のひとつに参列しているのです。きょうこの日ここに立ち、主のみ業にかかわることができるのは言葉に言い表わし難い特権であると、兄弟姉妹の皆さんに祝辞を申しあげます。今こそ、何千年にもわたって多くの予言者たちが語り、書き記してきたその時なのです。」

そして、第一副管長のヒーバー・C・キンボールが、凍土を「つるはしで打ち、……ヤング大管長が最初の土を掘り起こし」ました。大管長は聖徒たちを高らかに祝福して会を閉じ、会衆はそれに「アーメン」と唱和してこたえたのでした。その後、人々は「穴に鋤を入れるため先を争って集まって来ました。」その場に居合わせた

ロレンゾ・ブラウンは、「およそ150人の参列者がこの作業に携わった」と書き残しています。

2カ月後の4月6日の水曜日、教会員は隅石を据える式典に参加するため、再びテンプルブロックに集まりました。「デゼレトニュース」によると、「麗しい天気で、聖徒たちにとっても天使にとっても、これ以上の日は望めない……ほど」でした。

あの、足をぼろ布で包んだ、貧しい移民の聖徒がその会衆の中にいたかどうかは定かではありません。しかし、ロレンゾ・ブラウンはそこにおいて、3つの音楽隊と、軍隊、合唱団の演奏を楽しんでいました。「人であふれていて、見るのも聴くのも大変困難だった」とわずかに不満を漏らしています。しかし、奉献の祈りの間は静寂が広がり、ロレンゾはブリガム・ヤングが「私たちは、この神殿の南東の隅石を、いと高き神に捧げます。願わくは、この隅石がその役目を果たし、主の宮居が『もろもろの峰』の合間に建てられるという、聖なる予言者の予言が成就するよう、我らの心に靈感を与えられた主がよしとされる時まで、ここに平安のうちに存続しますように」とはっきりと述べる言葉を聞くことができました。

翌日パーレー・P・プラットは聖徒たちに言いました。「隅石を据えるに当たって、私にはジョセフ・スミスとそのほかの親しい霊たちが……私たちの上にとどまり、また、許可を得たことか、ほかに忙しい用事がなかったからか、天使や霊たちが向こうの世界から集まっているように見えました。」

式典が終わって間もなく、ブリガムは石盤を取り、数年前に示現で見た神殿の概略図を描きました。そして、「東には大管長とふたりの副管長を表わす3つの尖塔が、また、同様に西には管理監督とふたりの副監督を表わす3つの尖塔が建つ。東の塔はメルキゼデク神権を、西の

塔はアロン神権を表わす」と、説明しました。

1年半後の1854年8月17日、神殿の概要が「デゼレトニュース」に発表されました。そして、これがそれからの数年間、非モルモン系新聞の神殿に関する記事の情報源になりました。たとえば1857年には「イラストレイテッド・ロンドンニュース」が、これを基に美術家が作った大きな木版画を掲載し、概要の再録をしました。こうした記事の多くは、聖徒たちの前に横たわる事業が途方もなく大きなものであることを強調し、中には神殿の完成を危ぶむ者も多かったようです。

信仰の礎

この後40年という星霜^{せいそう}を重ねた物語には、確かに多くの困難がつづられました。しかし、聖徒たちがひるんだことはありません。ヨーロッパ各国からこの新しいシオンに移住してきた彼らは、村や集落を建て、灌溉設備^{かんがい}や畑を作っている、神殿建設の理想と、いつの日かその聖壇にひざまずく日が来るのを決して忘れることはなかったのです。聖徒たちはすでにバプテスマの水で神と誓約を交わしていました。自分自身と死者に昇栄をもたらす誓約を交わしたいと願う心が、グレートベースン(「広大な内陸盆地」の意)と呼ばれるこの荒涼とした地域にあっても、その厳しい自然に打ち勝つ霊的な強さを聖徒たちに与えていたのです。

教会の建築技師だったトルーマン・エンジェルは、みずからの技術的な未熟さを自覚していました。ブリガム・ヤングの示現を実現するため、彼は1856年に「建築宣教師」としてイギリスに派遣されました。1857年5月に彼が帰還するまでの建築技師不在の間、神殿建築現場での作業は滞りがちでした。後に、エンジェル兄弟は心

からの謙遜^{けんそん}さを込めて、この仕事に対する決意を次のように述べています。「私は疲れ切っている。でも、もし〔ヤング大管長と〕兄弟たちが、ちりの中の小さな虫のように取るに足りないこの私を『教会の建築技師』として支持してくれるのなら、兄弟たちに仕え、自分をおとしめることのないよう努力しよう。……主の助けがあってこれを成し遂げられるように。」

エンジェル兄弟の帰還からわずか2カ月後、聖徒たちはビッグ・コットンウッド・キャニオンに集まっています。教会に不満を持って任務を放棄した連邦官吏たちが偏見に満ちた報告をしたため、合衆国大統領ジェームズ・ブキャナンが直ちに2,500人の軍隊を送り、この地に規律を確立し、ブリガム・ヤングを更迭^{こうてつ}して新しい知事を任命するという知らせが入ったのです。引き延ばし工作が効を奏して、軍はワイオミング州のフォート・ブリッジャーで越冬を余儀なくされたものの、春になっても軍事攻撃の脅威は依然として続きました。1858年の3月末、ブリガム・ヤングはソルトレークシティとその北に在住する3万人の聖徒に、南に移動するよう指示しました。これに続いて聖徒たちが取らなければならなかった行動を考えると、彼らの悲しみはどれほどだったでしょう。すなわちブリガム・ヤングは、神殿の土台全体に土をかぶせて、耕したばかりの農地に擬装するように命じたのです。労働者たちは、切り出された石を隠しました。

幸いなことに、アメリカ陸軍との紛争は外交的な解決を見ることができました。聖徒は「恩赦」を受けることに同意し、軍はソルトレークシティの西南56キロの地点に基地を設置することに同意したのです。しかしながら、軍隊がこの協定に反してソルトレークシティを制圧し、神殿のために奉献された地を汚すようなことが

あれば、聖徒たちは自分たちの家に火を放つ覚悟を固めていました。

しかし軍が協定を守ったため、2カ月後の1858年7月に、聖徒たちは自宅に戻ることができました。この不安な状況の中で、1860年の春に土台の掘り出しが指示されるまで2年間、神殿の建設は手つかずの状態で見捨てられました。それから、次の悲劇が神殿の建設計画を襲ったように思われました。土台の壁に大きな亀裂が発見されたのです。この土台ではヤング大管長が示現で見た神殿を支え切れないことは明らかでした。そのため聖徒たちは、元の石をすべて底から取り除き、モルタルなしでびったり合うように切り出された高品質の石と交換するという、気の遠くなるような作業を開始しなければならなかったのです。1862年までには古い石がすべて取り出されました。そして、土台が土で覆い隠されてから9年後、神殿予定地が選ばれてから実に20年後の1867年に、初めて神殿の壁が地表面に現われたのでした。

巨大なみかげ石

もともと神殿の壁の材料には、日干しれんがと砂岩が候補に挙げられていました。しかし、土台に亀裂が発見されたため、ヤング大管長は主要な構造にはかこう岩を使う決意をしました。上質のかこう岩は、リトル・コットンウッド・キャニオンというソルトレークシティから32キロ南東の溪谷にありました。

ジョセフ・フィールディング・スミス大管長は、少年時代に幾夏かりトル・コットンウッド・キャニオンで過ごしました。男たちが「巨大なみかげ石の石材を……神殿まで運ぶために」切り出しているのを見た記憶がありました。スミス大管長はこう語っています。「牛に荷車



ソルトレーク神殿の建設を描いた新作映画「主の山」のスタイル。上——砂岩の土台を埋め込むために溝を掘る。

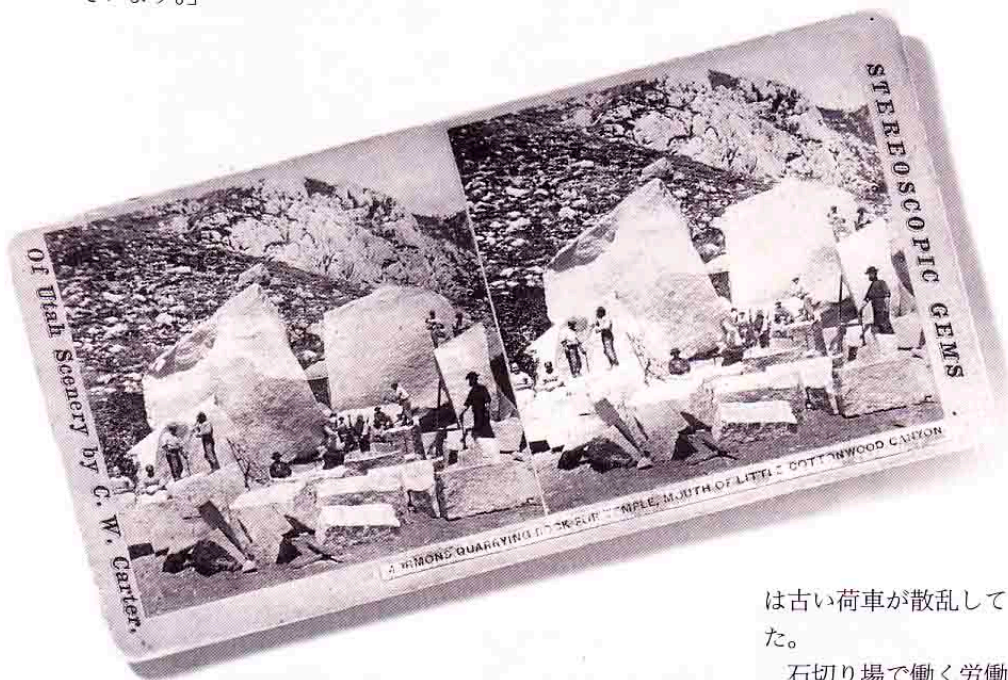
左下——1858年、神殿建設地を覆い隠すために土台を埋める。右下——掘り起こされた砂岩に亀裂を見つけ、指摘す

るブリガム・ヤング役の俳優。土台用の砂岩は、実際には、後にかこう岩のブロックと交換された。



を引かせていた当時のことや、重い荷をぐいぐい引いていたこと、ときには渓谷を下る途中で荒削りの石材が荷車からずり落ちて谷底に落ちてしまったことなどを覚えていています。」

言います。比較的小さい石は荷車に載せて運び、大きな石は特別な荷車で運びました。運搬の途中で壊れる荷車も多く、夏季にはソルトレークシティへの道の途中に



最初に神殿に到着した石材は、ほぼ1トンから2トン半の重さがあり、リトル・コットンウッド・キャニオンの石切り場から牛に引かせて運ばれてきたものでした。ときには、ひとつの大きな石材を石切り場から神殿まで運ぶのに、4日もかかることもありました。アニー・ウェルズ・キャノン「大きな石が……4頭の牛に引かれて道を行くのを見たことがあります。私たちは畏敬と敬度の念に打たれながら、道に立って眺めていました」と

は古い荷車が散乱していることも少なくありませんでした。

石切り場で働く労働者の中には、教会の公共事業部で雇われた人たちもいましたが、自分で寝る場所を確保し、労働時間を奉仕している人も多くいました。デンマークからの移民ヤン・ニールセンはこう記憶しています。「神殿用地で外壁の石材を切っている人々のために、長い間毎月1ドル献金していました。また、リトル・コットンウッド・キャニオンの入り口にある石切り場でしばらく働きました。その間、部屋代は自分で払い、寝具も自前のものを使って労力を提供したのです。」

イギリス出身の熟練した石工ジョン・ロー・モイルも、



かこう岩はソルトレークシティから南東32キロに位置する石切り場(前ページ)から切り出され、牛に引かせた荷車でテンブルスクウェアまで搬送された(上)。その後、熟練した



職人たちが石材を正確な寸法に仕上げた。この作業の様子はここに紹介する史料写真と「主の山」の1シーンに描かれている。

この時期に大きな犠牲を払った人のひとりです。モイル兄弟は金曜の晩と土曜の終日だけユタ州アルパインの自分の農場で働くことにしていました。そして毎週月曜日の朝には、家からソルトレークシティまで歩いて戻り、金曜日まで神殿で働くのでした。しかしモイル兄弟は、事故のために片足を非常な苦痛を伴う手術によって切断しなければなりません。ところが彼は、手術後の回復期間中に自分で木の義足を作り、苦痛に耐えられるようになるまで農場の周りを歩き回りました。そしてとうとう、ソルトレークシティまでの32キロ以上の道のりを歩いて行き、再び神殿で働き始めたのでした。

家族の伝える話によると、「神殿の東側の足場に登り、神殿建設に貢献するため『聖きを主に捧ぐ』と彫り上げ

た」のは、ほかならぬジョン・モイル兄弟だったので。

1868年の暮れ、神殿の建設は再び遅れました。西部と東部を初めて結ぶ、大陸横断鉄道の工事が優先されたからです。しかしながらこの遅延が幸いして、鉄道本線から支線ができ、1873年には石切り場と神殿建設現場を結ぶ路線が敷設されたのでした。そのため、巨大な石を蒸気機関車で輸送できるようになりました。

1876年には建設作業員が「小型で移動式の(蒸気)機関」を設置して、壁に石を持ち上げるクレーンに利用し始めました。ブリガム・ヤングは死を迎える1年足らず前に、当時ミシガン大学で学んでいた息子のひとりに手紙を送り、「私の知るかぎり、主の神殿建設が始まって以来初めて、蒸気機関の助けて石を積んでおり、今や進

ちよく 抄 状況の早さと手軽さには非常に勇気づけられる」と、誇らしげに書いています。

時を惜しんで

ブリガム・ヤングは、最後の病を押して、この世での生活の終わりの近さを感じ取ったのか、まるで時を惜しむようにほかの神殿の建設に着手しました。1871年11月9日には、ユタにもうひとつの神殿用地が奉獻されました。このセントジョージ神殿は、比較的小規模の神殿ながら、この地を神殿で満たすというブリガム・ヤングの願望を表わしています。セントジョージ神殿の建築技師はトルーマン・O・エンジェルで、完成時にはノーヴー神殿と同規模の神殿になりました。1877年1月1日、ブリガム・ヤングはささやかな献堂式を管理した後、帰路ユタ州マンタイに立ち寄り、4月25日にはその地で神殿用地を奉獻しました。そして、3週間以内に同じくユタ

州ローガンでも神殿用地の奉獻を行なったのでした。

それから数週間後、死去するわずか3カ月前、ブリガム・ヤングはハワイ伝道部のウィリアム・E・パック伝道部長に次のような書簡を送りました。「今年は教会歴史の中で比類のない年になりました。……6カ月の間にひとつの神殿が献堂され、ほかにふたつの用地が主なる神のために奉獻されて、すでに建築が始められています。一方、(このソルトレークシティの)神殿の工事は、建設開始以来最大の熱意とエネルギーをもって推し進められつつあります。」

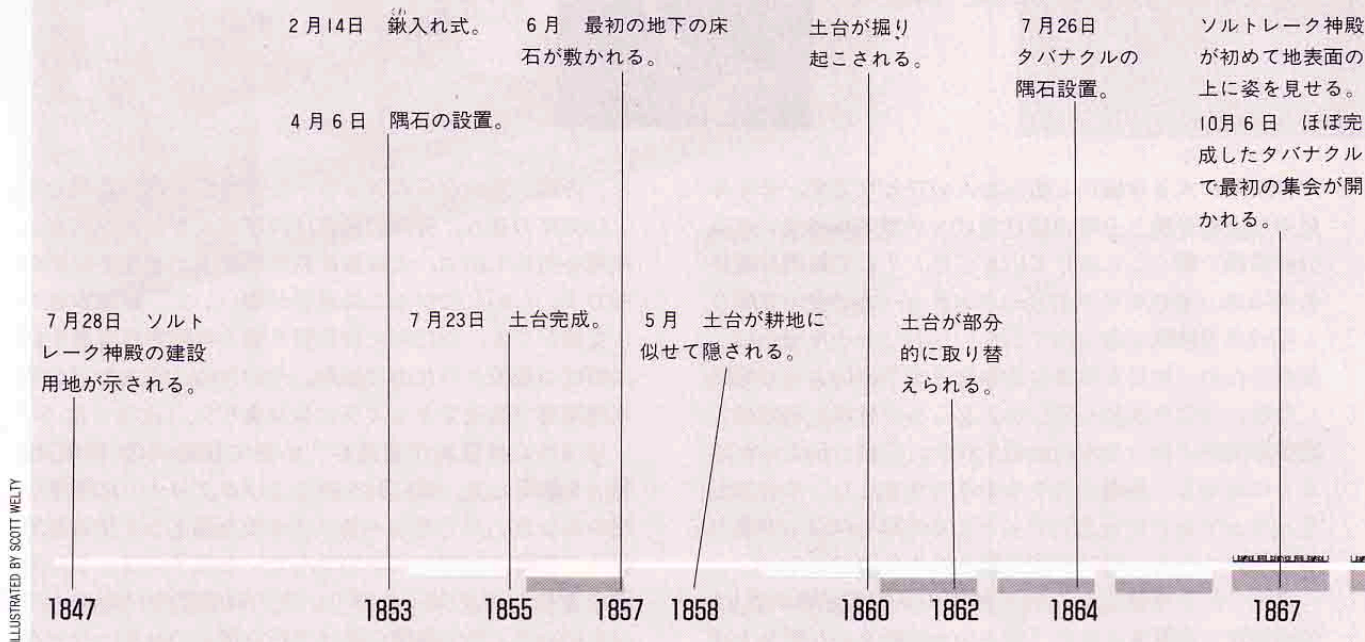
セントジョージ神殿の完成はまた、ソルトレーク渓谷の「大いなる神殿」を完成させようという、期待と望みを新たにする役目を果たしました。ブリガム・ヤングの妻のひとりルーシー・B・ヤングは、生者と死者のためにセントジョージ神殿で奉仕するように召されました。教会の公式刊行物によると、「病に悩み苦しむ人々が……神殿に来ると、ヤング姉妹が直ちにその世話に呼ば

年表——建設予定地の決定から ソルトレーク神殿献堂式までの46年間

人手の制限されていた19世紀の末日聖徒がソルトレーク神殿建設に要した想像を超える労力を理解するには、

次の年表を研究してみるとよいでしょう。同時期に建てられたユタ州のほかの神殿の建設期間と、同じテン

ブルスクウェアにあるタバナクルならびにアッセンブリーホールの建設期間に注目してください。



れることがたびたびあった」とあります。また、12年もの間、自分の力で歩くことのできなかつた姉妹が「連れて来られ、ヤング姉妹の信仰あふれる励ましの下、その日の儀式を受けた後は完全にその病を癒された」のでした。このような霊的体験は、聖典の予言を実現したいという望みと相まって、聖徒たちをソルトレーク神殿の完成へと駆り立てたのでした。

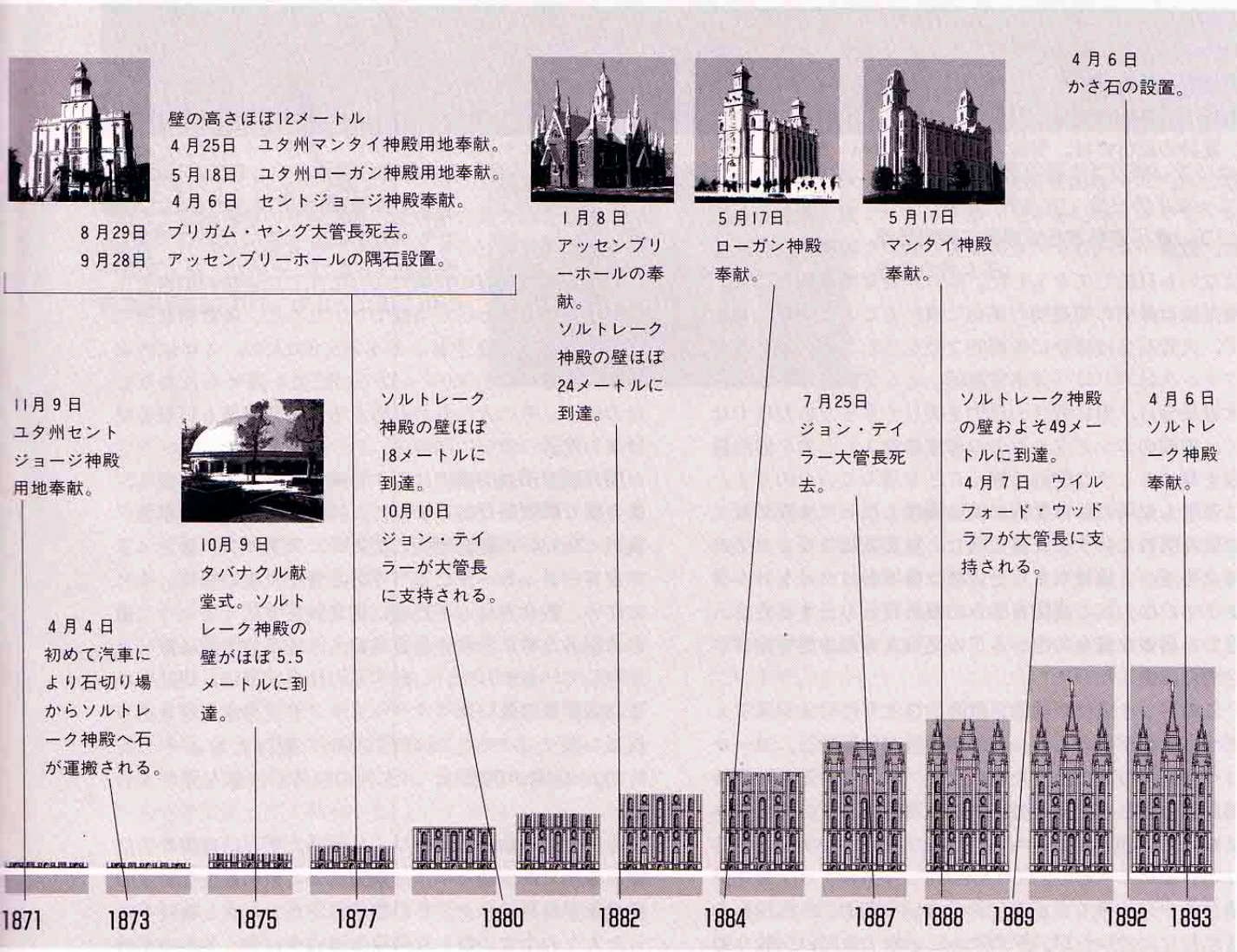
苦難を乗り越えて

ブリガム・ヤングが死去した時、神殿の外壁は約12メートルの高さまで積み上げられていました。しかし1880年代当時、合衆国政府から教会の一夫多妻の慣行を破棄するように圧力がかかり、法律上の争議が持ち上がりました。この過程で教会の神殿は差し押さえられ、ソルトレーク神殿の建設が脅かされました。ブリガム・ヤングはこの争議は承知していたものの、直接的なかわりは

免れました。後継者のジョン・テイラー大管長は連邦保安官を逃れて隠遁中の1887年に死去しました。そしてすでに教会所有の土地建物を押収し、神殿をも没収する意向のあった連邦政府との交渉は、第4代大管長ウィルフォード・ウッドラフに引き継がれたのです。

80歳の予言者にとって、これは非常に残酷なジレンマでした。1888年には、ローガン神殿とマンタイ神殿もすでに完成を見ており、ますます多くの末日聖徒が神殿儀式の祝福にあずかっていました。後にウィルフォード・ウッドラフはこう語っています。「私はソルトレーク神殿の完成を目にしたいと願っています。貧しい私ですが、この業に500ドル寄付します。主もまたその完成を望んでいらっしゃると思います。ですから兄弟の皆さん、どうか必要な経費を集めることに努めてください。」

ウィルフォード・ウッドラフが大管長に聖任された翌年に、神殿の壁は48メートルの高さまで積み、ウッドラフ大管長は暖房・電気系統やほかの設備の設置に最終



的な決定を下しました。その間も、連邦政府からの圧力は衰えることはありませんでした。

1890年9月、ウッドラフ大管長が公式の宣言を発表し、10月の総大会で聖徒に支持されるに及んで、ようやく神殿押収の危険は去りました。大管長はその後直ちに、ソルトレーク神殿の完成を目指して一層努力を傾注しました。

建設の続行には、聖徒たちの犠牲が伴いました。1890年ごろ、ユタの風景画家ジョン・ヘイフェンとローラス・プラットがジョージ・Q・キャノン第一副管長を訪れ、教会がヨーロッパでの美術の勉強を後援する可能性はないか打診してきました。ふたりは交換条件として、帰国後は教会の建造物の美化に携わることと同意したので、大管長会はほかに美術的才能を示した数人とともにフランスはパリに「美術宣教師」として派遣しました。大管長会は、単に教会の建物を美しくするためだけでなく、神殿のエンゲウメントの部屋に参入した者の霊的経験を高めるような壁画を描くことを望んでいたのです。ここでも兄弟たちは誓約に従い犠牲を払って家族や友人を住み慣れたユタの渓谷に残し、見知らぬフランスでの都会生活へと旅立ちました。教会指導者はソルトレークシティの大切な建物をさらに優れたものとするため、乏しい神聖な資金の中からこの兄弟たちの才能を伸ばす目的に出費したのでした。

この召しを受けた美術宣教師のひとりにジョン・フェアバンクスがいました。1890年6月24日月曜日、ヨーロッパへの長い旅に出るためにフェアバンクス兄弟は朝4時に起きました。「6時に、まだ眠っている下の3人——クロード(乳児)、オーソ、リーロイ——にキスをした。それから妻にキスをし、別れを告げた。」フェアバンクス兄弟は多少の心残りも記しています。「妻はこの別れを非常に悲しんでいたが、どうすることもできない。残りの

子供たち、下からアーボン、バーノン、ネティ、そしてリオが駅まで見送りに来た。汽車がやって来て、悲しそうな面持ちで目にいっぱい涙をため、いとしい子供たちをプラットホームに残し、別れを告げて汽車に乗り込んだ。」

汽車はソルトレーク渓谷から南に走り、プロボでローラス・プラットがフェアバンクス兄弟に合流しました。次の停車駅ユタのスプリングビルでは、3人目の宣教師ジョン・ヘイフェンが、「目に涙して」待っていました。

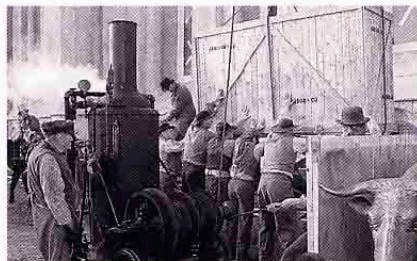
しかしこのような犠牲も、神殿建設の最終段階での深刻な経費不足をどうすることもできませんでした。教会に対する連邦政府の挑戦によって生じた経済的損害を正確に計算することは不可能です。しかし、多妻婚家庭の世帯主である働き手およそ1万5,000人が、3年以内の投獄、あるいは2,000ドル以下の罰金を課せられたりしたのです。その人たちが所有する農場や事業も打撃を受けました。

連邦政府が教会資産に対する締めつけを緩めた後も、資金繰りの困難は続きました。1891年の全国的な景気の後退と1893年の経済恐慌に加えて、エドマンズ法とエドマンズ・タッカー法に基づく教会資産没収の影響、それに伴い、教会自身の不動産に賃貸料を支払うという二重の負担のために、教会と会員個人の経済的困難は厳しさを増していきました。しかもその後合衆国は、1893年から1899年まで続いた「クリブランド」恐慌に巻き込まれていったのです。4年間に600の銀行とおよそ1万5,000の企業が倒産し、ユタ州の経済も打撃を受けました。

それにもかかわらず、ウッドラフ大管長は確固たる信仰をもって、聖徒たちに神殿完成のために必要な資金の提供を要請しました。その要請にこたえようと犠牲を払った人々の中に、ひとりの少年がいました。この少年は



かこう岩のブロックを所定の位置まで運び上げるために起重機(手動クレーン)が使われていた。1880年代にチャールズ・R・サベッジによって撮影された写真(上)では、少なくとも1台の



クレーンは蒸気の動力で作動していた。左——映画「主の山」からの1シーン。蒸気機関で馬車から木枠を下ろしているのが見える。

近所の農場で仕事を見つけ、数時間の労働の報酬に25セントを賃金としてもらいました。「私は硬貨を握り締めて家まで走って帰った」とこの少年は後に回顧しています。そして、すぐに父親を見つけると言いました。「お父さん、見てよ！ 今度プロボに行くとき、このお金で新しいジーンズが買えるよ。」

父親は息子にウッドラフ大管長の要請をやさしく思い出させて言いました。「この25セントのうち10セントは、ウッドラフ大管長がソルトレーク神殿のために要るんだよ。ほら、代わりに15セントをあげるから、一緒に監督の所に10セントを持って行こう。監督がソルトレークシティまで送ってくれるから。」

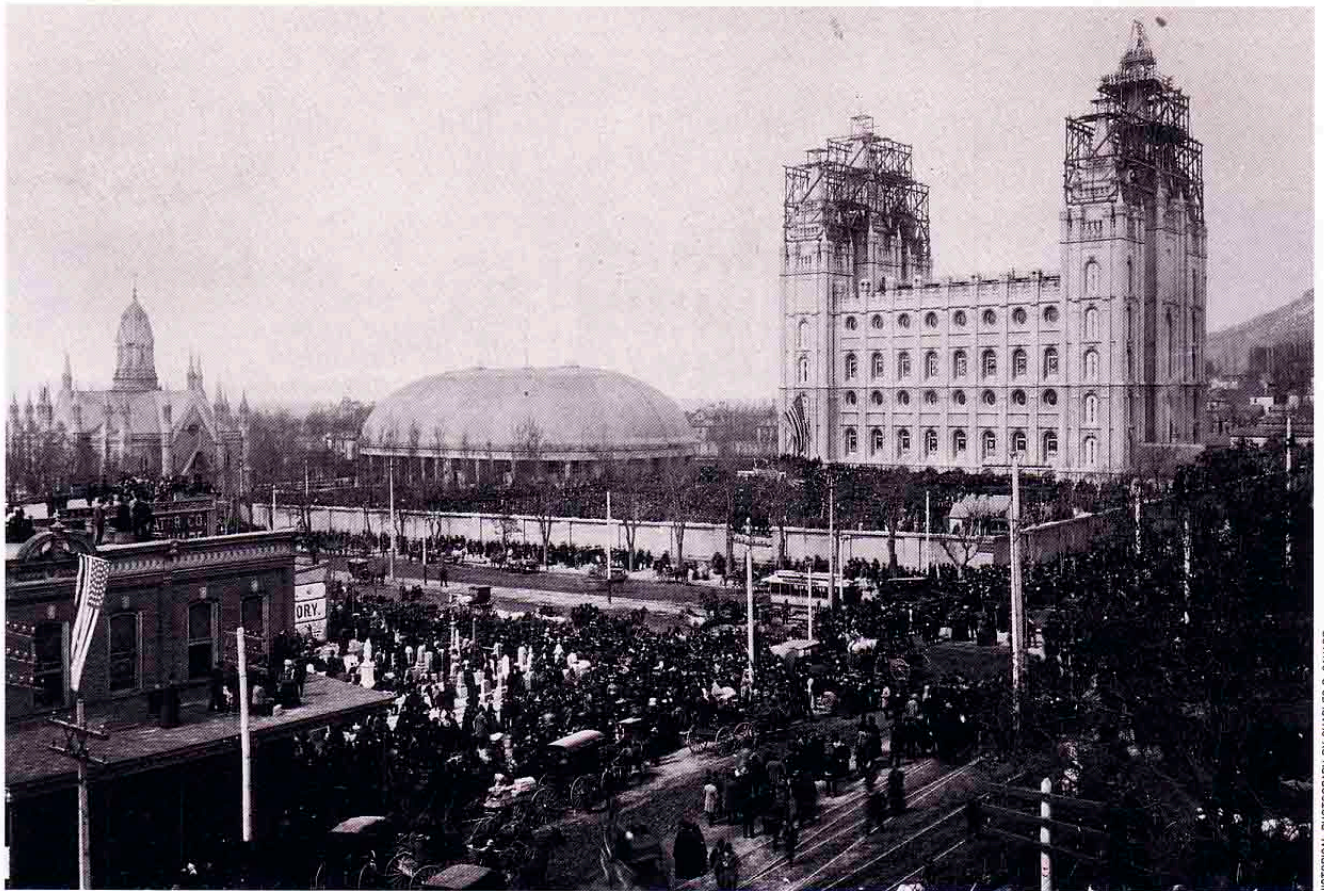
おおぜいの忠実な聖徒たちが捧げた献金によって、ブロック工事はついに最後の石——かさ石を置く段階に達しました。実に神殿建設の業は苦難を乗り越えて進められた、信仰と厳しい忍耐の事業だったのです。

「最も大いなる日」

1892年4月6日、隅石が置かれてから39年後、聖徒たちがかさ石の設置を祝うために集まった時は皆、喜びにあふれました。45年前に建設予定地に印のくいを打ち込んだウッドラフ大管長は、その日記に「この山岳の地で末日聖徒の最も大いなる日」と感慨を込めて書き残しています。

半期総大会ですでににぎわっていたソルトレークシティは、この歴史的行事のためにさらに多くの人出で膨れ上がっていました。5万人がテンプルブロックにひしめき合い、近くの屋根や窓、電柱からもおおぜいが式典の模様を見守りました。そのほかにも無数の人々が道を埋め尽くしていました。

当時、十二使徒定員会会長であったロレンゾ・スノーは、「神の子たち〔が〕みな喜び呼ばわった」(ヨブ38:



HISTORICAL PHOTOGRAPH BY CHARLES R. SAVAGE

1892年4月6日のかさ石設置式には何千人もの人が神殿を取り囲んだ(上)。右——映画「主の山」のスチール。ウイ



ルフォード・ウッドラフ大管長役の俳優が、天使モロナイ像の土台のかさ石を下ろすスイッチを押そうとしている。

7)時に、天で最初のホザナ斉唱があったことを会衆に指摘した上で、「町じゅうの家という家が振動し、この町のどこにいても聞こえるように、そしてその声が永遠の世界にまで届くよう、男女ともに声の限りにこの言葉を叫んでください」と歓喜に満ちた様子で指示しました。

そして式典が最高潮に達した時、神殿の頂上から教会建築技師のジョセフ・ドン・カルロス・ヤングがウッドラフ大管長に叫びました。「かさ石を積む用意が完了しました！」その声に、85歳の予言者は「壇の前方に進みいで、厳かな静寂に支配された大会衆の注視の中で、両手を高く掲げて高らかに叫びました。「^{なんじ}汝らイスラエルの家の子ら、地上の全国民よ、耳を傾けよ。我ら今、予言者、聖見者、啓示を受ける者ブリガム・ヤングによって置かれ奉獻されし土台に建つこの神の宮居に、かさ石を置く。」こう言ってスイッチを押すと、「止め金が外れ、神殿の最上段の石がその場所に収まった」のでした。

その後スノー長老の指示に従って、聖徒たちは「神と子羊にホザナ！ ホザナ！ ホザナ！ アーメン！ アーメン！ アーメン！」と叫んだのです。この心からの感謝の斉唱は3度繰り返され、「ホザナ」「アーメン」という叫びに合わせて群衆が白いハンカチを打ち振るごとに、その強さを増したのです。

教会員のジョン・リングレンは、その瞬間の感激に浸っていました。「何千人の目が涙でぬれていた。……叫び声は周りの丘にこだまして、地はその音で振動しているように思えた。」ユタ在住で、教会員ではない学校教師のマリー・H・ナッティングは、東部に住む友人にこう書き送りました。「あの力強い叫び。これを聞いた時は、実に特別な気持ちになりました。そして、モルモニズムはいまだ健在であり、決して『消滅』の危機にはないことに気づいたのです。」

タバナクル合唱団の高らかな歌声に続き、数千人の会

衆が、最も魂を揺さぶる賛美歌のひとつとして知られ、56年前のカートランド神殿の献堂式で初めて歌われて以来、各神殿の献堂式で歌われてきた『主のみたまは火のごと燃え』を歌い上げました。ユタの写真家で合唱団員のチャールズ・サベッジは、「全会衆が声を合わせて、あの偉大な歌『主のみたまは火のごと燃え』と歌った時、今まで経験したことのない感覚が体を走った。ホザナの斉唱も長く記憶に残るもので、生涯再びあのような斉唱を聞くことはないだろう」と書いています。

十二使徒定員会会員フランシス・M・ライマンは参列者に、「できるだけ早く神殿を完成して1893年4月6日に献堂式を執り行なうことができるよう、全体としても個人としても、必要なぎり迅速に経費の献金を行なうことを決意する」よう提案しました。神殿建設作業員のジョン・ディーンによると、この提案に対して「集まった大群衆は」右手を上げ、「耳をつんざくような『賛成』の叫び」でこたえたのでした。

かさ石設置記念式典の後、多くはその場に留って天使モロナイの像の除幕に立ち会いました。ユタ生まれの彫刻家サイラス・ダリンが制作したこの像は、打ち出しの銅で作られ、22金の金ばくが施されていました。そして日暮れ前に、この巨大な像は、64メートルある東側の中心の尖塔上にある球形の石の上に据えつけられました。

その後の1年間というもの、大工やペンキ屋、左官、そのほかの熟練工が神殿内装の完成に向け、惜しみなくその技術を駆使して働きました。神殿内部は高級な木材と石こうによる装飾が施され、壁画や絵画、鏡、上品なカーテン、当時購入し得るかぎりの最上のカーペットと家具、照明器具にシャンデリア、そして特別注文のステンドグラスの窓で飾られました。1893年4月6日に予定された献堂式に向けて、すべての準備が整えられたので

す。期日までに神殿を完成させるために、作業員は休日も返上して働きました。1892年の感謝祭にも「ほとんど全員が平常どおり仕事をした」と、ある作業員は書き残しています。

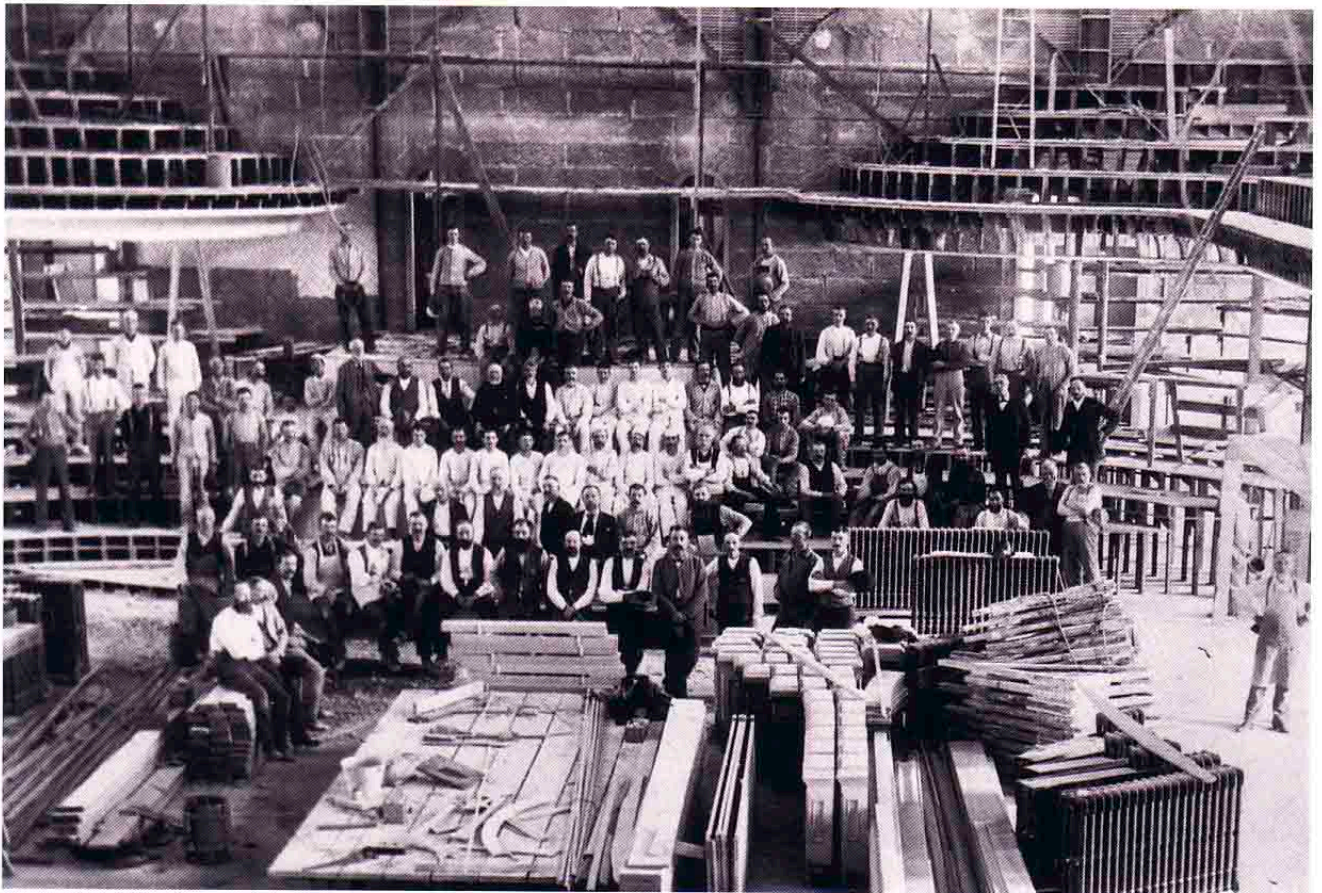
物理的な準備が整うにつれ、再度新たな霊的備えが始まりました。1893年3月、大管長会は書簡を送って、一人一人に心からみずからの魂を探り、清めるように勧告しました。

「神殿の献堂式が近づくに当たって、……この聖なる建物に入る人が皆ふさわしくあるように、……そして建物自体も……主のみ前にふさわしく認められるように、私たち大管長会の胸にある思いを皆さんと分かち合えたらと思います……。

今こそ和解の時です。神殿に入り、聖会で主のみ前にみずからを差し出す前に、互いに対する荒々しい思いや不親切な思いをすべて捨て去り、争いをやめるだけでなく、その原因も取り去って、そのような争いに至らせたすべての思いを除去し、互いに罪を告白し合って赦しを求めてください。また主が悔い改めのみたまを賜わり、私たちが主のみ前にへりくだり互いに赦し合って、天に赦しを求めるように私たちの赦しを請い願う人々に愛と寛大さをもってこたえるように勧めます……。

この勧告に従おうと努力するとき神の祝福があり、さらに、これがすべての人々の団結した努力となるように、1893年3月25日の土曜日を断食と祈りの日としてここに定めるものとします。」

聖徒の中には、1893年4月の総大会の数週前にソルトレークシティに到着した人たちもいました。ルーシー・フレックとその夫は、1893年3月8日にアリゾナからユタに向けて出発しています。ルーシーの日記には「汽車で行く資金がなかったため馬車で出かけた」と記



1892年4月のかさ石設置後、1年後の献堂式まで神殿の内装を整えるため、作業員と熟練した職人は疲れも忘れて必死に働いた。

日誌に「建物は豪華にしつらえられていた」と書き記しています。

「神のみたまが宮居を満たした」

されています。ともに旅に出たのは「ウィリアムと私、ランニング姉妹とジョエルにジョン、ヘンリーとエマ・タナーと子供ふたりだった」とあります。「馬車の旅は雪と泥に悩まされながらの寒くつらい旅」でした。フレック家族はユタ州のビーバーでついに汽車に乗ることになりました。「ウィリアムと私にとっては初めての汽車の旅でした。ビーバーシティからソルトレークシティまでは、多くの友人や親戚しんせきが一緒でした。駅で汽車が止まるたびに、献堂式に出かける人たちが乗り込んできました。」

最初の献堂式の前夜、ウッドラフ大管長は初めて教会外の招待客を神殿内に招き入れ、案内して回りました。これは数十年続いた敵対関係の後で、教会外の隣人たちとの関係を修復したいと願う教会指導者の和解への第一歩でもありました。連邦政府が任命したユタ準州最高裁判所判事チャールズ・S・ゼインは長い間教会を批判してきましたが、その彼でさえ神殿のデザインや、装飾と技能の優秀さに感嘆し、オープンハウスに参加した後、

1893年4月6日の朝が来てウッドラフ大管長が神殿に入り、努力と犠牲を払い続けた40年間のクライマックスを迎える時がついに来ました。「テンプルブロックの門が8時半に開けられ、通りはその何時間も前から人で混み合っていた」とある神権指導者は書いています。神殿の上階のアッセンブリーホールに「2,200人を一人一人入場させるのに」2時間を要しました。

タバナクル合唱団の団員トーマス・グリッグスは8時20分に南門に到着しましたが、列があまりに長く、9時55分になってもまだ門から3メートルの所にいた」と書いています。「風とほこりと少量の雨のため、非常にうっとうしい状態の中、長時間待ち、その挙げ句にドア係に……『これ以上入れません』……と言われるとは。……しかし、合唱団員としてよく知られていたのも……南西の入り口から急ぎ通してもらうことができた。」

式を中心は、年老いた予言者が「その目的のために置かれた厚手の豪華なビロードで布張りされた台にひざまずき」、この式とそれに続く41回の献堂式のセッションの

ために準備された奉献の祈りを捧げることになりました。

ブリガム・ヤング・アカデミーの学生エイミー・ブラウンはこう記しています。「人生で最も感動的で霊的な経験のひとつだった。……雪のように真っ白な髪とあごひげの〔ウッドラフ大管長〕が清さとやさしさ、信仰深さの神髓のような姿で会衆の前に立った時は、まるで古代の予言者のようだった。」

ウッドラフ大管長にとっては、まさに夢の実現の時でした。大管長は日誌の中で次のように打ち明けています。「およそ50年前、ボストンの地で示現を見た。その示現の中で私は、聖徒らとロッキー山脈に赴き、神殿を建て、その神殿を奉献したのだった。」

献堂式の集会の間、神殿内で聖徒たちはみたまがふんだんに注がれるのを体験しました。「神のみたまが宮居を満たしていた」とある参列者は書いています。献堂式の公式速記者として奉仕したスーザ・ヤング・ゲイツはこう書き残しています。「1893年4月の初旬は、あらしと悪天候に見舞われていました。地の上には灰色の雲が重くのしかかり、毎日雨が激しく降っては、風がものすごい強さで駆け抜けていきます。それでも、この日々の輝きと栄光は、その陰鬱さにはるかに勝るものでした。」(本誌『神のみ力がともにありました』pp. 44-48参照)

ソルトレークシティの「ウーマンズ・エクスポーネント」誌の編集記者アニー・ウェルズ・キャノンは、「私自身この神殿の壁が積み上げられるのを見てきた何千人のうちのひとりにすぎないが、完成の日を待ち望む思いの深さのために、まるで壁の一部になったようにさえ思える。……聖徒にとってこの献堂式は、長年の一大イベントともいえるべき出来事である。なんと長い間神殿の建設工事を見てきたことか。ひとつずつ石が積み上げられるのを見ては、その完成が安全かつ完全であるよう、

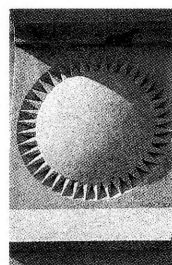
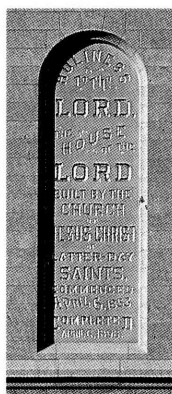
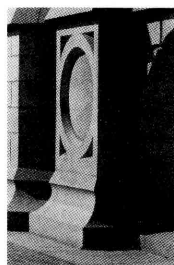
私たちの信仰と祈りが捧げられてきたのである。いまや、ようやく立派に完成した神殿を目にして、だれもが喜ばしく、また誇りに感じているだろう」と記しています。

多くの聖徒にとって神殿の奉献は、神の民とともにロッキーの山間に集合するという努力に対して主が与えてくださった、霊的な承認のしるしとなったのです。また、主と結んだ誓約と、末日に神殿が「もろもろの山のかしら」(イザヤ2:2)として建てられるという古今の予言者たちの示現の実現のために払った犠牲を、主が受け入れられたことを確認するものでもあったのです。

教会の指導者J・ゴールドデン・キンボール長老は、1915年の総大会で「一致した努力と犠牲」というテーマで説教し、この中でソルトレーク神殿について触れ、「私にとって石材の一つ一つが説教と同じです」と語りました。「それぞれが苦難と犠牲について語り、説教しています。神殿の石材一つ一つが教えてくれるのです。この神殿が献堂された時、私には山上の垂訓以来の偉大な説教を聞いたように思えました。……窓という窓、尖塔という尖塔、神殿のすべてが神のみこころを伝えているのです。そして、それを建てた人々の信仰の証となっているのです。」□

この記事はリチャード・ナイツェル・ホルザップフェル著「石の一つ一つが説教——ソルトレーク神殿建設にまつわる壮大な物語」(ソルトレークシティ、ブッククラフト社、1992年)を基に書かれたものです。ほかに新たな目撃談や回想録が追加され、引用文にはつづりや句読点を標準化した部分があります。この記事の引用文献の英文の脚注を希望する方は、International Magazines, 50 East North Temple, Salt Lake City, Utah 84150 U.S.A までお申し込みください。

ソルトレーク神殿の詳細



1893年の献堂式の際に、神殿の寸法が発表されている。(下記はメートル法に換算したもの)——

建物の奥行き——57メートル

建物の幅——30メートル

東側中央の塔の高さ(尖塔も含む)——68メートル

西側中央の塔の高さ(尖塔も含む)——67メートル

壁の高さ——51メートル

最下部の壁の厚さ——2.7メートル

最上部の壁の厚さ——1.8メートル

基礎部分——厚さ5メートル、深さ2.4メートル

建築面積——2,030平方メートル

神殿東側正面には象徴的なデザインと重要性を持つ石が据えられている。地面から上に向かって順に取り付けられているのは、地の石、月の石、日の石、星の石である。地と月と日のモチーフは、星の栄、月の栄、日の栄の「3つの栄光」を表わしている。(Iコリント15:40-42; 教義と聖約76:50-112参照)

東側中央の塔には、ラッパを吹いて地上の国々に永遠の福音を告げる天使

モロナイの像がある。(黙示14:6参照)

ほかのモチーフとして、神の存在を示す雲の石(列王上8:10-11; マタイ17:5参照)と奉献の言葉がある。

きよ 聖きを主に捧ぐ

主の宮居

末日聖徒イエス・キリスト教会建立

建設開始1853年4月6日

建設完了1893年4月6日

この碑文の真下の窓のアーチには、神の万能の資質とその守護の象徴であるすべてを見通す目が刻まれている。(詩篇33:18; 箴言15:3参照)かなめ石にある「わたしはアルパであり、オメガである」の碑文は(黙示1:8参照)、イエス・キリストの永遠の存在を確認するもの。そして、握った手のモチーフは友好の手を差し伸べることを表わしている。

神殿西側正面には、北の夜空で北極星を指している大熊座、別名北斗七星の7つの星を象徴する星が描かれてい

る。このモチーフの象徴的意味には、「迷える者が神権によって自分を見いだすことができるように」との願いが込められている。

神殿の周囲には計50の月の石が陰暦の1年を象徴して置かれている。

大きな入り口は両側にふたつずつ計4つあり、幅2.5メートル、高さ4.9メートルある。ドアは高さが3.65メートルで、1枚の幅は1.2メートル。ドアの取手には蜜蜂の巣箱が彫刻され、「主に聖なる者」(ゼカリヤ14:20-21)という言葉がアーチ型に刻まれている。また、各取手の台座には、オリーブの小枝のリースの中に握手する手、かなめ石とアーチ、そして「1853年—1893年」の年号が入れられている。

神殿内と神殿の建物そのもののこうした彫像は、神殿の儀式で明らかにされる霊的な教えを強化するものである。(ブリガム・ヤング大管長時代の)ジョージ・A・スミス副管長はこう書いている。「その一つ一つが道徳的な教えを説き、すべてが日の光栄の王国を指している。」□

耳を傾け、信頼し合うことにより、 姉妹のきずなを強める

「シオン^①の娘、主の業に仕えて共に恵み得ん」(賛美歌195番)扶助協会の賛美歌のこの一節を聞くと、教会の姉妹全体のきずなは、姉妹どうしの個人的な結びつきによって強められることを思い起こします。そのためひとつの方法は、心から相手の話^②に耳を傾ける態度を身につけることです。もうひとつの方法は、相手を信頼し、また相手からも信頼されるようになることです。私たちは、このような方法を通して、聖典に記された女性たち、たとえばマリヤとエリサベツ、ルツとナオミが模範として示してくれたような一致を培うことができるのです。

耳を傾けることを学ぶ

第1に、心を開いて互いの話に耳を傾ける必要があります。積極的に耳を傾けるならば、心から相手の話を聞くことができます。ただ自分の知っていることだけを話すのでは、相手の話を聞いていることにはなりません。人の話を聞くときには、相手の言ったことをほかの言葉で言い直したり、いくつか質問をしたりすると、役立つことがあります。そのようにすると、話し手が自分の置かれた状況をよく考え、自分自身で決断できるようになることがよくあります。相手に代わって問題を解決しようとするよりも、相手に関心を示す方がその人にとってずっと助けになるのです。

ある母親がネイサンという息子のわがままな行動に手を焼いていました。息子の反抗的な言葉や行動を改めさせようと苦心していた彼女は、よその家族が子供たちをどのようにしつけているのかを観察しました。さらに、親身

になって話を聞いてくれる友人に悩みを打ち明けました。友人は、「ネイサンが学校から帰ってきたとき、あなたは何をしてあげるの」という有益な質問をしてくれました。そこで、ふだんの対応の仕方を話しているうちに、ネイサンの反抗的な行動を知らず知らず^③に促すような接し方をしており、自分自身の態度や行動を変える必要があることに気づいたのです。

それ以後、従来とは違った接し方をするように努めました。すると、息子



ILLUSTRATED BY KRISTY MORRIS

も変わり始めたのです。こうして、思いやりのある友人が心から耳を傾け、質問をしてくれたおかげで、彼女の生活に祝福がもたらされました。

●「心から相手の話^②に耳を傾ける」とはどういうことでしょうか。そのようにしたとき、どのようなことが起こりましたか。

信頼することを学ぶ

相手との間に信頼関係が築かれてい

るとき、私たちは自分の感情や経験、望みを正直に伝えることができます。そして相手も、率直に自分の心の内を打ち明けてくれるようになります。

しかし、相手の秘密を守らなくては信頼関係を築くことはできません。使徒パウロは、「家々を遊び歩〔き〕、……むだごとをしゃべって、いたずらに動きまわり、口にしてはならないことを言う」(Iテモテ5:13)おしゃべりな人に対して警告しています。

内密に打ち明けられた事柄を私たちが尊重するならば、私たちの友人は心の奥底にある思いを打ち明け、助けを求めてくれるようになります。マリーとヘザーはこのような信頼関係を持っていました。ヘザーには4人の子供があり、家事の重荷で疲れていました。マリーがみだりに促されてヘザーに電話をすると、ちょうどヘザーが思いをだれかに打ち明けたいと思っていた時だったということがよくありました。ヘザーはこのように語っています。「彼女に『どうしているの』と聞かれると、自分の気持ちを抑えることができずに泣きながら話すことがよくあります。彼女が私の話を聞いてくれるので、気持ちが軽くなるんです。彼女は私のしゃべったことをだれにも言いません。マリーと知り合えたことを主に感謝しています。」

このような信頼関係を築くなら、私たちは「相愛し相一致してその心を結〔ぶ〕」(モーサヤ18:21)ことができるようになります。

●同胞である姉妹たちの信頼にこたえるにはどうしたらよいでしょうか。

●信頼できる友人に正直に心を打ち明けた時、どんな気持ちになりましたか。

□

アビラ兄弟の信仰

ホセ・オヘダ

パトリシオ・アビラ兄弟は、チリのサンティアゴ神殿に初めて参入した時、彼の人生を変え、ひいては周囲の人々にも影響を与えることになった、ある経験をしました。神殿の中で彼の心に、支部の兄弟姉妹たち皆とともにこの聖なる場所に集っている光景が、はっきりと思い浮かんだのです。私たちは、アルゼンチンの西部に位置するアルゼンチン・メンドサステーキ部オブラドル支部に集う会員で、一番近い神殿は、サンティアゴにあります。

アビラ兄弟は、帰宅してからも、オブラドル支部の兄弟姉妹たちが全員神殿に参入するという、心に思い浮かんだ光景を忘れられませんでした。彼は信仰を持ってそのことを私たちに話して聞かせました。会員の中には内心不可能と思いつつあいまいな笑みを浮かべる人や、関心を持たないと発言する人がいました。しかし、サンティアゴの神殿へ支部として訪問することを真剣に考える人たちもいました。

支部長の指示の下、アビラ兄弟は即座に会員を助ける行動に移りました。彼は、まず集会を計画しました。そこで神殿訪問について話し合い、旅行費用の募金を開始



アビラ兄弟の心には、同じ支部の兄弟姉妹たち皆とともにチリのサンティアゴ神殿に集っている光景がはっきりと思い浮かんだ。

しました。(この初期の募金は、後で非常に助けとなりました)続いてアビラ兄弟は、参加者全員が霊的に備えられるよう神殿準備セミナーを開始する手配をしました。彼の心配りと力強い指導のおかげで、私たちもやる気が出てきました。

神殿訪問への動きは、アビラ兄弟が仕事のために町を離れた夏の間一時的に弱まりましたが、秋に彼が戻って来ると、再び活気を帯びてきました。神殿準備セミナーは最終段階を迎え、準備のできた人たちは、支部長のオランダ・マリス兄弟とステーキ部長のマーティン・ボルヘス兄弟から神殿推薦状の面接を受けました。私たちは3日間の神殿訪問を計画し、出発日を1992年4月16日の木曜日と設定しました。

私たちの前に立ちふさがるとは、^{めい}唯一の障害、それは貸し切りバスの費用を調達することでした。そのためには58人分の席を埋める必要がありました。実は、出発まであと3週間を残すだけだったにもかかわらず、44人分の席しか埋まっていませんでした。もし残りの席を埋められなければ、一人一人の負担する運賃が増すことになり、そのために神殿に行けなくなる人も出てくるのです。



そんな中であっても、アピラ兄弟の信仰は揺るぎませんでした。彼は、もし支部の会員で席を埋めることができなければ、メンドサステーキ部の各ワード部、支部に呼びかけるといふ決断を下しました。アピラ兄弟とアレジャンドロ・スリアーノ兄弟は、ステーキ部内のワード部、支部を一つ一つ訪問し、小さなポスターをはり、神殿訪問の旅に加わるよう呼びかけたのです。

その後起こったことは、信じる者にはしるしが伴う、という言葉を立て証してくれました。というのは、興味を持った人たちが次々と申し出てきて、空いていた席がすぐに埋まってしまったからです。応募してきた人の中には、メンドサステーキ部以外の会員もいました。フレール兄弟姉妹のように近くのアルゼンチン・ゴドイ・クルステーキ部の会員もいましたし、バダミ家の5人のように、1,000キロ以上も離れたサンティアゴデルエステロ州の会員もいました。

もろもろの手続きが終了した段階で、神殿訪問の準備をしていながらも、旅行のための費用を全額支払うことのできない家族が、3家族ありました。しかし、最初のころの集会で集めていた募金のおかげで、足りない分をどうにか補うことができました。こうして、すべての準備が整ったのです。



左——自分の夢が実現し、支部で開かれた家庭の夕べで、その喜びを伝えるアピラ兄弟。
上——今回の神殿訪問の旅には、写真の兄弟姉妹を含め68人の会員が参加した。右——バスがアンデスの曲がりくねった山道を走り抜ける間も、参加者全員の胸は愛の気持ちで満たされていた。





PHOTOGRAPHY BY JOSÉ OJEDA



出発の前夜、神殿訪問の参加者全員が特別な家庭の夕べのために教会に集まりました。その後、遠くからやって来た会員は、翌朝5時半に出るバスに間に合うよう教会で一夜を過ごしました。朝早く出発すれば、チリの税関を余裕を持って通過することができるのです。

旅行中、全員が愛の精神と会員どうしのきずなを強く感じていました。惜しみなく食物や飲み物を分かち合う光景が見られました。家族がお互いにいろいろな体験談や証^{あかし}を分かち合いました。賛美歌も数多く歌われました。窓の外を何度も眺めては、アンデスの山々の雄大さに感嘆の声を上げました。バスは絵のように美しい町々を通り過ぎ、雪をかぶった山の頂、そして峡谷や川を横切る曲がりくねった道を走り抜けて行きました。神のみ手によってこの美しい世界ができたことを疑う人は、だれひとりいませんでした。

チリの国境を越えると、神殿はもうすぐでした。神殿の尖塔^{せんとう}の上に天使モロナイの像が見えた時、私たちは喜びで胸を躍らせました。モロナイの吹き鳴らすらっぱの音が聞こえてくるようでした。神殿職員のかたがたが私

たちの到着を歓迎してくれました。彼らは、チリの会員宅に私たちが宿泊できるよう手配してくれていました。私たちは早速それぞれの家庭へと分散し、風呂に入り、私たちのために予定されている特別な神殿の儀式を受ける支度をしました。

翌日、実際に主の宮居の中に立った私たちは、厳粛な思いに満たされました。まさに言葉で言い表わせないほどの経験でした。あの聖なる場所に満ちているみたまを単なる言葉で言い表わすことは決してできません。だれもがこのようなみたまを体験しなければならないのですが、へりくだる心と悔いる精神をもって神殿推薦状を提示する人だけがそれを経験できるのです。そして、そのような心と精神をもって、洗い清め、エンダウメント、結婚、家族の結び固め、死者のためバプテスマなどの儀式は執行されるべきなのです。

この機会を通じて、私たちは自分たちより先に神殿参入した人たちの気持ちが理解できました。一度神殿の中に足を踏み入れた人は、そこから二度と出たくなる、と言っていた彼らの言葉のとおりでした。残念ながら、



パトリシオ・アビラ



アルバ・デ・カバイエロ



マリス家族



アマリア・デ・オヘダ



デルフィン・デ・ラ・クルス・ベヨ

PHOTOGRAPHY BY NÉSTOR CURBELO

思い出と証^{あかし}

神 殿訪問の旅に参加した兄弟姉妹の証を紹介しましょう。

パトリシオ・アビラ 「奇跡は本当に起こるものなのです。心からへりくだり、創り主への大きな愛を込めて申しあげます。私は、主のみ手に使っていたいただいたこの機会と、聖なる神殿に神の子供である会員たちとともに参入できたこの大いなる祝福に心から感謝しています。このよ

うな祝福が末日聖徒全員の上に注がれるよう願っています。私たちが主の喜ばれることを行なう力を持てますよう、また、いつまでも互いに愛し合えますように。」

アルバ・デ・カバイエロ 「自分の両親や、すでに亡くなった家族の一員と結び固められた時には本当に感激しました。この地上を去る時が来ても、私を待っている家族がいる

ことを知りました。」

マリス家族 「兄弟愛、親切、キリストの純粋な愛を大いに感じました。たとえようのない幸福な気分です。このような永遠の祝福を追い求めるようすべての兄弟姉妹にお勧めします。」

アマリア・デ・オヘダ 「主が私たちを愛しておられることを知りました。」

デルフィン・デ・ラ・クルス・ベヨ 「妻や子供たちと永遠にわたって結び固められ、大きな祝福を感じています。」

そのようなすばらしい一日にも終わりはやって来ました。私たちは、チリの受け入れ家族の元に帰りましたが、翌朝もう一度神殿に戻りたいという気持ちでいっぱいでした。

翌日は復活祭を次の日に控えた金曜日だったので、チリの全土から非常に多くの人々が神殿を訪れていました。私たちは神殿から遠く離れた所に宿泊していたので、儀式には間に合いませんでした。とてもがっかりしましたが、だれも不平を言わず、自分たちの置かれた状況を素直に受け入れました。その夜、私たちは合同ですばらしい家庭の夕べを開き、証を述べ合い、ともに賛美歌を歌いました。そして、翌朝最初の儀式を受けられるように調整を図りました。

土曜日の朝に受けた儀式はまさしく大きな喜びとみたまに満ちたものとなりました。私たち神殿訪問のグループ全員が主の宮居に一堂に会したのです。私たちは聖なる儀式を今度は死者のために行ないました。儀式の間、主が私たちの奉仕する姿を見て喜んでいらっしゃるのを感じました。

儀式が終わって、いよいよアルゼンチンに帰る時がや

って来ました。ところが、バスが故障していたため、修理の間、サンティアゴにその夜もう一泊しなければいけなくなりました。しかし、このような困難も私たちの前にあっては祝福と変わりました。私たちはもう一度全員で家庭の夕べを開き、賛美歌を歌い、祈りを捧げ、証を分かち合い、大きな喜びを感じたのです。全員が文字どおりひとつとなれました。

日曜日、私たちを乗せたバスは、シオンの賛美歌を車中に響かせながら、ついに帰途に就きました。疲労でとうとう眠ってしまった人たちもいましたが、起きていた人たちは、過ぎ去った数日間の出来事に思いをはせていました。バスは日曜日の午後2時半に、私たちの教会に到着しました。そして、主の戒めに従って、聖餐会を開きました。

支部の兄弟姉妹に一体どれほど多くのことを話さなければならなかったことでしょうか！ いつの日か彼らもまた私たちと同じ思いを感じられたらと、どれほど願ったことでしょうか。

アビラ兄弟の夢は、確かに、実現したのです。□



アレジャンドロ・ゴンサレス



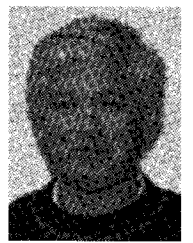
アルベルト・リサンドレロ



エディリア・ベルトラニー



ロハス家族



ホセ・バダミ

アレジャンドロ・ゴンサレス
「このような心の高められる経験ができてとても喜んでます。再びこのような機会があるよう願っています。私たちの証と経験をひとつにし、それを支部の兄弟姉妹を強めるために用いて、彼らが同じ祝福にあずかれるようにしたいものです。」

アルベルト・リサンドレロ 「私は、天父の神性、天父が神の子である私たちに抱いておられる愛について新たな証を心に刻むことができました。」

エディリア・ベルトラニー 「主が私を神殿に参入させてくださったことは、実に意義深い経験でした。死者のためのバプテスマや結び固めの儀式を受けている時、霊界にいる人々を身近に感じました。また、彼らが私たちの助けによって永遠にとともにいられることに、喜び感謝しているという実感が持てました。」

ロハス家族 「今回の神殿訪問を計画してくださった人々に感謝しています。私たちは永遠の家族として結び固めを受けることができました。」

ホセ・バダミ 「すばらしい旅でした。活気に満ちていました。兄弟姉妹のかもし出す、すてきな雰囲気の中で、楽しく過ごしました。アビラ兄弟、そして彼とともに働いた人たちに感謝しています。彼らは、今回の旅行のために犠牲を払って調整や計画をしてくださいました。その働きゆえに主が彼らを祝福されますように。」 □

祝福をもたらす神殿参入

フランシス・W・ホジソン

子育てに、予期せぬ苦勞や思いがけない祝福が付き物であることは、親ならだれでも承知しています。夫も私も、親の役割を永遠の観点から考えるにつけ、その責任の重大さを感じます。

私たちには、18歳から30歳までの子供がいますが、どの子も、気質や関心事が異なっています。さらに、靈的成長の度合いも違います。しかし皆が、私たちの守るべき標準を重んじています。

彼らのこれまでの生活ぶりに問題がなかったわけではありません。それどころか、親として、涙をぬぐったことも少なくなく、心を痛めて祈ったこともたびたびありました。それでも私たちは、ほかの多くの親たちと同様に、子供たちが伝道や神殿結婚の目標に向かって何事もなく進んでくれるものと思込んでいました。しかし、すべての親たちと同様に、私たちも、自分の子供が過ちを犯すごく普通の人間であるという厳しい現実を思い知らされることになりました。

子供たちが10代になったころのことです。私たちは、子供たちには重大な過ちを犯す危険性が潜んでいると気づきました。それに対処するため、できるかぎり手を尽くしたつもりだったにもかかわらず、危険性が消えていない

ことを知った時は、特に不安に駆られました。私たちに、これ以上一体何ができるでしょうか。私たちは子育てに関する勉強をし、教会の召しも熱心に果たしました。家庭の夕べも定期的に開き、祈りも欠かしませんでした。にもかかわらず、親として失敗するかもしれないという不安が、折にふれてつきまとったのです。

そんなとき私たちは、子供たちが正しい選択をするよう助けるに際して、最も頼もしい味方を見いだしました。それは絶大な効果をもたらしました。特別な祝福となったこの味方とは、私たちが主の宮居に参入し、主の助けを受けるという特権です。子供たちの成長に伴い解決のむずかしい問題が持ち上がったとき、私たちは神殿に参入し、その具体的な問題を主のみもとに携えて行くことができるのです。

神殿で主を礼拝するとき、私たちは家族に祝福をもたらす、次の3つの段階を踏むことにしています。第1に神殿での礼拝のために自分自身を備えます。第2に実際に神殿に参入します。第3にその神殿参入をさらに神聖なものとしします。

準備の段階は、神殿参入の前夜から始まります。助けを必要としている子供のために断食を始めるのです。また、時間の許すかぎり、神殿に参入するに

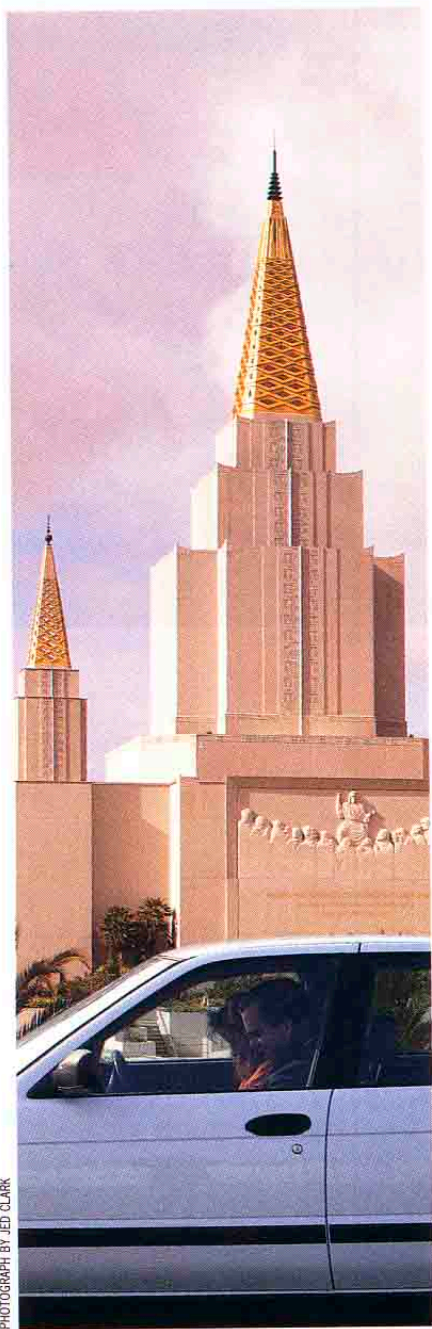
先立って思いや態度においてふさわしくなるため、また個人的な準備のために祈ります。

神殿に入ると、まず子供の名前を祈りの名簿に加えます。そして、ふさわしい場所で、親としての役割や、助けを必要としている子供のことについて深く考えます。祈りの輪の中に加わる機会があれば、ほかの信仰深い教会員たちとともに、さらに靈的な力を感じられるでしょう。

儀式が終われば、最後の段階が残っています。平安と夕べの静けさの中で、神殿のみたまに満たされながら、ふたりだけになれる静かな場所を見つけます。そこで、祈りを捧げ、この神殿参入をさらに神聖なものとするのです。ともに祈るとき、聖霊がふたりの心をひとつにしてくださり、私たちは、同じ目標に目を向けることができます。祈りを終えるとき、私たちはいつも平安に満たされます。このように、断食と祈り、そして神殿での礼拝を通して備えが完了し、天父から託された子育てについて私たち夫婦の思いは完全にひとつとなるのです。その時にもたらされる崇高な精神により、私たちは、ほかのどんなことをするよりも天の力を豊かに受けるのです。

すぐにはっきりと答えを受けることもありました。答えが帰ってきた時、

この世では、家庭を滅ぼそうとサタンが猛威を振るっています。しかし、私たちのために主の宮居があることを考えると、慰めが得られます。



最初何かの偶然かと思いました。しかし、天の窓が開かれ、祝福がもたらされたことは、すぐにはっきりしました。奇跡や劇的な何かが起こるわけではありません。そのようなことは必要ではないのです。

ときとして、答えが、子供たちの生活にかかわりのある人々を通してもたらされることもありました。大学生だった娘が霊的にも肉体的にもとても危険な状態にあった時のことです。私たちが神殿に参入した翌日、娘の集うワード部の監督が彼女を訪ねた後、私たちに電話をかけてその時の様子を伝えてくれました。監督はその後3日間、同様にしてくれました。この立派な監督は、娘を慰め導くために、私たち親よりもはるかにすばらしい働きをしてくれたのです。

息子は、証^{あかし}を失って悩み、伝道に出るはずの時期もとうに過ぎてしまっていました。私たちは、息子のために幾度も特別な神殿参入をしました。神殿訪問するたびに彼の生活が少しずつ変わっていききました。やがて息子は、燃えるような証を持って伝道に出たのです。同様に、我が家のほかの子供たちも私たちの神殿参入を通して祝福を受けました。

神殿での礼拝を通して祝福を受けたのは、子供たちだけではありません。

ある時、夫はとても込み入った仕事上の問題に直面していました。彼は神殿で主にお伺いをたてようと決心しました。すると神殿参入をしたその日に、主は夫を祝福されました。彼の心に問題の答えとなるある聖句が思い浮かんだのです。

家に帰ると彼は真っ先に聖典を開き、この問題解決の糸口を見いだしました。この経験によって、その聖句の新しい解釈の仕方を見いだすことができました。このように、直面している問題の答えとなる聖句を思い起こさせることにより、主は子供である私たちに語られることがあります。主のみたまが、聖句をどのように生活に生かしていけばよいかさとれるよう助けてくれるのです。定期的に聖典を学ぶことにより、私たちは清い思いで満たされます。そして必要なときに、主は私たちに励ましてくださいます。神殿で学んだこの原則に心から感謝しています。

この世は邪悪に満ちています。サタンが至る所で家庭を滅ぼそうとして、猛威を振るっています。しかし、私たちのために主の宮居があることを考えると、慰めになります。家庭生活においてどんな問題に直面したときでも、聖なる神殿で安らぎを得ようと努めるなら、必ず喜びを見いだせるからです。

□



© LDS

主の聖き宮居^{きよ}

ジェイ・M・タッド

末 日聖徒イエス・キリスト教会の神殿では、天父の救いの計画に関する詳細な教えが授けられ、数々の儀式が執行されています。また、忠実な者たちに約束された祝福を主の弟子たちが得ようとするときに求められる献身という要素についても、詳しい教えが授けられています。

ソルトレーク神殿では、これらの数々の教えや儀式は異なった場所で授けられます。たとえば、バプテスマはバプテスマフォントで施され、エンダウメントは「創造」「エデンの園」「現世」「月の光栄」を象徴する絵の

描かれた部屋で行なわれます。美しい調度品で装飾された「日の光栄の部屋」では、忠実な者たちに用意されている、昇栄した気高い状態を感じることができます。また、神殿内には10以上の「結び固めの部屋」があり、永遠の結婚の儀式や親子の結び固めの儀式が行なわれています。さらにソルトレーク神殿には、主の教会にあって管理する権能を有する神権定員会のための会議室や各種の集会用の大きなアッセンブリールームも備わっています。



PHOTOGRAPHY BY WELDEN ANDERSEN; COPYRIGHT BY THE CORPORATION OF THE PRESIDENT, THE CHURCH OF JESUS CHRIST OF LATTER-DAY SAINTS; NO REPRODUCTION AUTHORIZED OR PERMITTED

上—創造の部屋 右—バプテスマフォント デビッド・O・マッケイ大管長の言葉にあるように、神殿では「永遠の生命に向けての一步一步の成長」が示される。私たちは、神殿の教えを通して、キリストの教えに沿った生涯を送るとはどういうことかを学ぶのである。



© LDS

COPYRIGHT BY THE CORPORATION OF THE PRESIDENT, THE CHURCH OF JESUS CHRIST OF LATTER-DAY SAINTS; NO REPRODUCTION AUTHORIZED OR PERMITTED





COPYRIGHT BY THE CORPORATION OF THE PRESIDENT, THE CHURCH OF JESUS CHRIST OF LATTER-DAY SAINTS; NO REPRODUCTION AUTHORIZED OR PERMITTED



COPYRIGHT BY THE CORPORATION OF THE PRESIDENT, THE CHURCH OF JESUS CHRIST OF LATTER-DAY SAINTS; NO REPRODUCTION AUTHORIZED OR PERMITTED

左——園の部屋 上——1階通路 神殿での教えや儀式は、霊のことを思う心（IIニーファイ9：39参照）を持つ、成熟した主の弟子たちのためのものである。「すべてその心正直にして真にへりくだりその精神悔いることを知り、犠牲を捧げ、すなわち主なるわれの命ぜんとするあらゆる犠牲を捧げて、以て汝らの誓約を進んで守らんとする者たちはわれの嘉納するところなり。」（教義と聖約97：8）

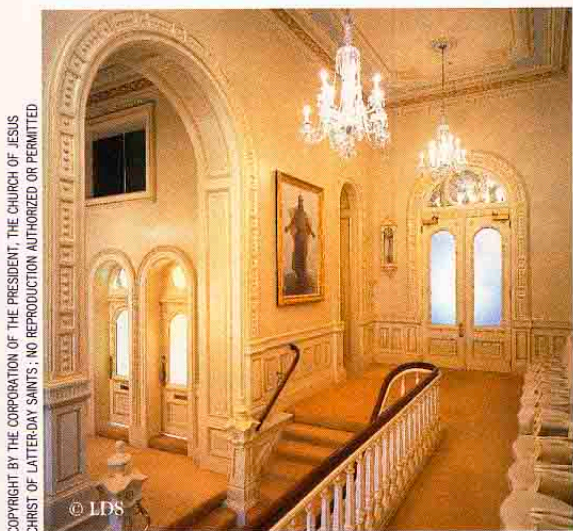
神殿では、真理を学ぶとともに、会員一人一人が誓約を交わす。彼らは二者、すなわち儀式を受ける本人と、すでにこの世を去り神殿における身代わりの儀式を霊界で受け入れるか拒むかの機会を与えられた霊たちのために儀式を受ける。自身のために教えと儀式を受けた教会員は、しばしば神殿に参入してすでにこの世を去った人々の身代わりとして、同じ儀式を繰り返し受けるように勧告されている。



上—現世の部屋 左—2階通路 右—月の光栄の部屋
神殿は、ひそやかな奉仕や霊的再生、瞑想、祈り
のためには理想の場所である。主の聖なる宮居に参入し、
人々への奉仕に心を向けるならば、理解の目が開かれ、
個人的な問題を解決する答えが示されることもよくある。
主ご自身、神殿を「祈りの家、断食の家、信仰の家、学
問の家、栄光の家、秩序の家、神の家」(教義と聖約88：
119)と語っておられる。



COPYRIGHT BY THE CORPORATION OF THE PRESIDENT, THE CHURCH OF JESUS CHRIST OF LATTER-DAY SAINTS ; NO REPRODUCTION AUTHORIZED OR PERMITTED



COPYRIGHT BY THE CORPORATION OF THE PRESIDENT, THE CHURCH OF JESUS CHRIST OF LATTER-DAY SAINTS ; NO REPRODUCTION AUTHORIZED OR PERMITTED

© LDS



COPYRIGHT BY THE CORPORATION OF THE PRESIDENT, THE CHURCH OF JESUS CHRIST OF LATTER-DAY SAINTS ; NO REPRODUCTION AUTHORIZED OR PERMITTED

© LDS





© LDS

COPYRIGHT BY THE CORPORATION OF THE PRESIDENT, THE CHURCH OF JESUS CHRIST OF LATTER-DAY SAINTS; NO REPRODUCTION AUTHORIZED OR PERMITTED

左——日の光栄の部屋 上——結び固めの部屋

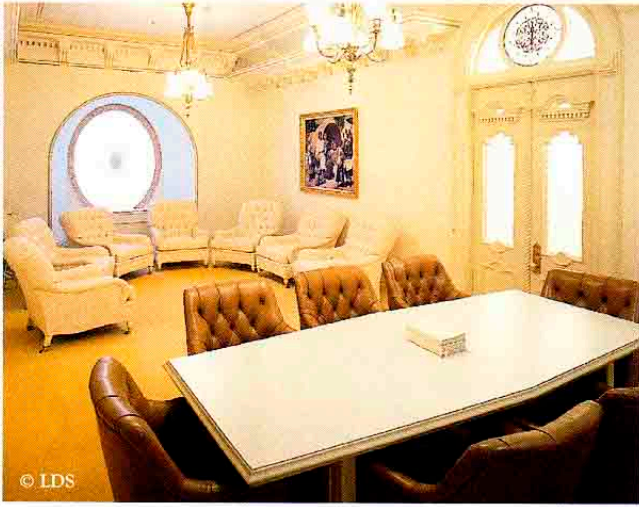
古代イスラエルの民と同様、私たち末日聖徒も、神に近づくための場所として神殿を聖別している。神殿の敷地も同様に聖なる場所として尊ばれている。神殿に参入する人々のふさわしい人格と、神殿内での教えや儀式の神聖さが相まって、神殿内には霊的な雰囲気満ちている。



© LDS



© LDS



© LDS



© LDS

- 左上——大管長会と十二使徒の会議室
- 右上——十二使徒の会議室
- 左下——七十人会長会の会議室
- 右下——結び固めの部屋
- 次ページ——アッセンブリールーム

私たち末日聖徒は、神殿の有する完全さと一貫性を理解するにつれ、主イエス・キリストが予言者ジョセフ・スミスへの啓示を通して末日に神殿の教義と儀式を回復されたことに対する確固とした証拠を見いだすことができる。「この宮居に関するすべての事、この宮居に関する神権、またその建てらるべき場所などはわが僕ジョセフにわれこれを示すべし。」(教義と聖約124:42)

予言者ジョセフ・スミスはこう語っている。「さて、わ

れらの受けたる福音の中にわれら何を聞くや。喜びの声なり。天より聞ゆる愛憐^{あわれみ}の声、地より出ずる真理の声、死者のための喜びの音信^{おとずれ}、生ける者と死にし者とのための喜びの声、大いなる喜びの嬉しき音信^{うれ}なり。良き事の喜ばしき音信をもたらし、シオンに『見よ、汝の神しろしめす』と言う者たちの足は、山の上^いにありて如何に美しきぞや。カルメル^{ごと}の山の露の如く神の知識彼らに下らん。……

この故^{ゆえ}に、いざわれら一教会員として、一人の民として、また末日の聖徒として、義しきに適^{ただ}う捧物^{かな}を主に捧げん。またいざわれら、主の神殿の……中に於て、主が完全に受け入れたもう価値ある、われらの死者の記録を載せたる一冊^{ふみ}の書を主に呈せん。」(教義と聖約128:19, 24)□



LABORIC
PRIESTHOOD

アセンブリールームの一方の端はメルキゼデク神権の会長会が座る席であり、もう一方はアロン神権の会長会が座る席となっている。

ガム・ヤングが現われて彼に神殿の鍵を渡し、神殿建築を推し進め、献堂するように言ったことがありました。その夢は、この日実現されたのでした。

献堂の祈りの後、十二使徒定員会会長のロレンゾ・スノー長老の指揮によって、伝統となっていた「ホザナ」の斉唱が3度繰り返されました。これは、全員が起立して白いハンカチを頭上で振りながら「ホザナ」と3度叫ぶものです。「このホザナの声は、おおぜいの人々の心をわき立たせ、荘厳な建物の中を高らかにこだました」と、エメリン・B・ウェルズ姉妹は記しています。「聖徒たちは歡喜に満ち、その顔は喜びに輝いていた。この記念すべき時にあって……その場所一帯が榮光に満ち、清められたようだった。」

アセンブリールームにいた人々は立ったまま賛美歌を歌いました。「主のみたまは火のごと燃え みさかえ出づ、末の代に み恵みも、まぼろしも見え み使い、この世に降る」(賛美歌3番)多くの人々は涙を抑え切れず、最後まで歌うことができませんでした。

次々にもたらされる示現

このみたまは、続けて行なわれた献堂式がすべて終わるまでともにありました。できるだけ多くのふさわしい教会員が出席できるように、2週間で41

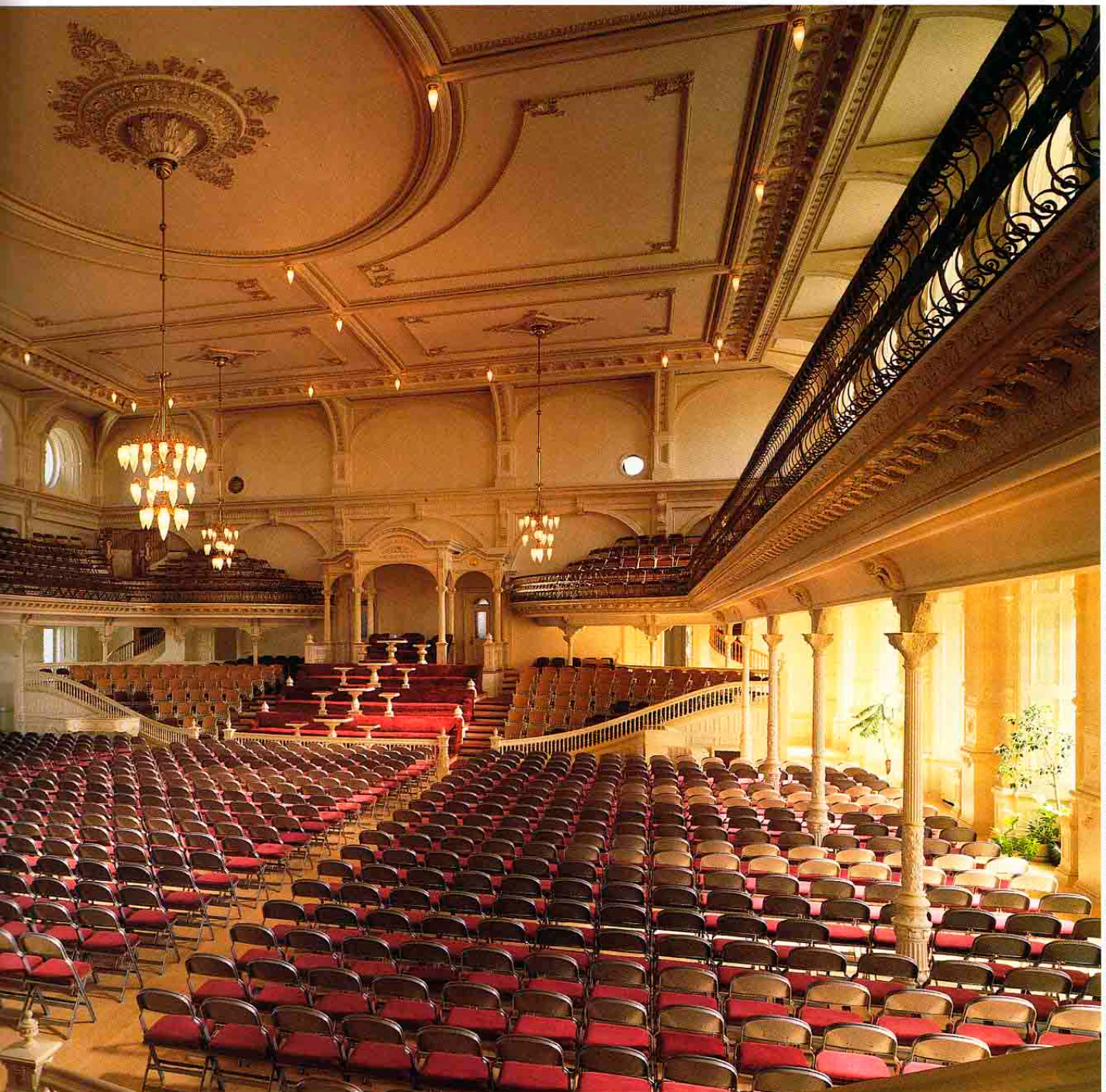
回のセッションが行なわれました。全体で7万5,000人余りの人々が式に出席しましたが、その時に感じた力強い、靈的な気持ちは、多くの人々にとっていつまでも忘れられないものとなりました。

その中のひとりでタバナクル合唱団の一員だったアンドリュー・スミス Jr. 兄弟は、1893年4月17日の月曜日、キャノン副管長が献堂の祈りを読み上げている時に目を開けてみました。その時の経験をこう語っています。「[キャノン副管長]の頭上、そして両肩の上から背後にかけて明るい光が現われるのが見えました。光はしばらくその場所にとどまった後、上の方に上がっていききました。すると、その中に人の顔が見えてきました。それはブリガム・ヤング大管長の顔でした。少し目を転じると……今度はジョン・テイラー大管長の姿が見えました……それからハイラム・スミスと思える人の姿が見え、……そしてすぐにそれとわかりましたが、オルソン・プラットの姿も見えました……祈りが終わり、ホザナの声が響きわたる直前からその声がやむまでの間、幹部の兄弟たちを取り囲むように明るい光の輪が輝いているのに気づきました……私は感極まって喜びの涙にむせびました。頭を下げていた少しの間は何も見ませんでした。しかし再び頭を上げると、壇上に座って



いる大管長会の一人一人の頭上にまばゆいばかりの光が見えました。話者が人々に語りかけながら顔の向きを変えらるたびに、それに合わせて光も動いていました。」

当時11歳だったジョージ・マンク兄弟は、母親と祖母とともに神殿の献堂式に出席していました。彼は「神殿のアセンブリールームの南東の円形窓に、人の姿が現われた」のを見ました。そのことを母親に話すと、驚いたこと



PHOTOGRAPH BY WELDEN ANDERSEN, COPYRIGHT BY THE CORPORATION OF THE PRESIDENT, THE CHURCH OF JESUS CHRIST OF LATTER-DAY SAINTS. NO REPRODUCTION AUTHORIZED OR PERMITTED

に彼女にはだれも見えないと言うのです。集会が続く間、彼は「ほかにもふたりの〔天使のような人〕が……部屋の上の方を南から北へ〔移動する姿〕を目にしました。……さらに、5人の人がこの大きな部屋に現われました。壁に並ぶ円形窓の下には、壁沿いに棚状の幅広の突き出しが伸びており、5人はその上に間隔を置いて立っていたのです。」彼の言葉を借りれば、今まで見た中で「いちばんきれいな人た

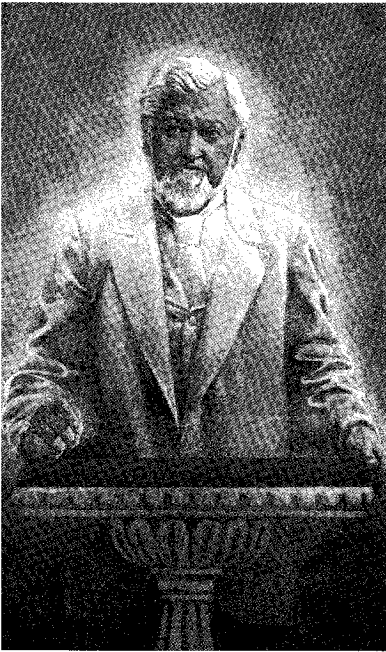
ち」だったということです。閉会の祈りの直前、彼は母親に言いました。「ママ、時計の下のあの人を見てよ、いちばんきれいだよ。ほら！ こういうふうに両方の手を上げてる人さ。」そう言ってジョージは自分の手を上げて見せました。彼は全部で8人の天のみ使いらしき人を見ましたが、彼の言葉によれば彼らは「ゆったりとして、長く垂れた白いローブを着ていて、全員ではなかったとしても、ほとんどの

人が波打つ長い髪をしていた」とのことです。

ハンス・ジェンセン・ハルズ兄弟もまた、同じような天よりの顕現を目にしてそれを日記に記しています。「私と家族はワード部の200人の会員とともに献堂式に参加する特権にあずかり、特別な時間を過ごした。〔教会〕幹部から大切な教えを〔賜わった。〕神のみ使いたちが南東の窓から入り、部屋の四方の隅に座すのが見えた。その中のふ

「神のみ力が

ラリー・ガート



ILLUSTRATED BY MITCHELL HEINZ

ウイルフォード・ウッドラフ大管長は、50年ほど前に見た夢のとおり、ソルトレーク神殿を献堂するため、説教壇の前に進み出た。

神殿の献堂に当たり、主は聖徒たちに霊的な恵みを注がれました。

ウイルフォード・ウッドラフは、1893年4月6日の朝、ソルトレーク神殿の南西の入り口から入り、4階に上がりました。午前10時、2,500人の人々が集う中、41回に及ぶ献堂式の最初のセッションが始まりました。この献堂は神殿の建設に当たって払われた犠牲と労苦の40年にわたる壮大な物語の結びの章となりました。

「[最初の] 献堂〔式〕には、主の軍勢がともにありました。」ウッドラフ大管長は、何度目かの献堂式の席で、会衆にそう語りました。「もしもそこに集われた人々の目が開かれたなら、ジョセフ・スミスとハイラム〔・スミス〕、ブリガム・ヤング、ジョン・テイラー、さらにこの神権時代を生きた多くのすばらしい人々、また、イザヤ、エレミヤといった末日の業を予言したすべての聖なる予言者と使徒たちが、私たちとともにこの場に集っているのを目にされたことでしょう……彼らは、主に受け入れられたこの宮居で、私たちとともに喜んでいました。そして〔ホザナ〕の叫びが全能の神の玉座に

届いた〔時〕」彼らもこの喜びの叫びに加わっていたのです。

1871年、ジョージ・Q・キャノン長老は、神殿が完成する時に「これまで人々が経験したことがないほどの神の大いなるみ力と栄光とが注がれるだろう」と予言しましたが、それが現実となったのです。

最初の献堂式

献堂の初日は荒天の1日でした。「サタンがほえ叫ぶだろうと予測されていたが、本当にそのとおりだった。ソルトレークにこれまでなかったようなあらし、風、雨、雪が吹き荒れ、多くの家々や木々が吹き飛ばされ……何百人もの人々が、雪の中で何時間も神殿の扉が開くの待った」とルーシー・フレック姉妹は書き記しています。

外では1日じゅうあらしが吹きすさんでいました。しかし神殿の中では平安と静けさがアッセンブリールームを満たしていました。そこでは大管長会のウイルフォード・ウッドラフ、ジョージ・Q・キャノン、ジョセフ・F・スミスと十二使徒定員会の長老たちが献堂式の始まるのを待っていました。4階にあるこの部屋的美しさと壮麗さは、すばらしく、心打つものでした。天井までの高さは11メートル、白と金に縁取られた木の彫刻、四隅に備えつ

ともにありました」

けられた、らせん階段。深紅のビロードで布張りされ、何段もある説教壇が、奥行き36.5メートルの部屋の両端に置かれています。東側の説教壇はメルキゼデク神権を、西側の説教壇はアロン神権を象徴していました。神権指導者たちは説教壇の後ろに並べられた深紅の布張りの白木のいすに腰掛け、そのほかの教会員は両端の説教壇の間の広い空間に並べられたいすに座っていました。

献堂式が始まる前から、力強いみたまがすでに部屋を満たしていました。会員たちは1893年3月25日、「一致の精神と霊的な清さを再新するために」行なわれた、特別な断食に加わるよう勧められていました。すべての人が、悔い改め、口論をやめ、罪を告白し、互いに赦し合うように勧告されていました。「教会幹部の間にはきわめて強い一体感が生じました」と、十二使徒定員会のフランシス・M・ライマン長老は語りました。会員たちもまた、「ソルトレーク神殿に目を注ぎ、その献堂に心を寄せながら」同じように一致の精神を感じていました。

魂の糧

音楽により主のみたまが人々の心に引き入れられました。献堂のために特別に取り付けられた大きなパイオル

ガンの伴奏で、300人から成る聖歌隊が賛美の歌を歌いました。聖歌隊は、男性が黒いスーツ、女性が白いドレスに身を包んでいます。また、歌は末日聖徒の作曲家によってこの日のために書かれた特別なものでした。「私たちにこんなにすばらしい音楽の才能があるとはそれまで夢にも思いませんでした」と、アニー・ウェルズ・キャノン姉妹は書いています。「歌詞は実に適切で美しく、曲も穏やかでありながら荘厳さに満ち、そしてすばらしい歌声が魂に糧を与えてくれました。」

聖歌隊のメンバーのひとりであったバーデラ・S・カーチス姉妹は「この世と高さ天との間の幕が開くのを」見たと言います。同じく聖歌隊の一員であったチャールズ・R・サベツジ兄弟は「私の心は平安で満たされ、体じゅうが満ち足りた思いに包まれた。……神殿で、目に見えない力をあれほど近くに感じたことはなかった」と記しています。

献堂式の公式の速記者として働いたスーザ・ヤング・ゲイツ姉妹は最初のセッションでその責任を果たしましたが、その時のことをこう記しています。「私は東側の説教壇の下段にある速記者の席に着いていた。〔ジョセフ・F・〕スミス副管長が聖徒たちに向かって話し始めるとすぐ、彼の顔から光が輝き出た。私は不思議な気持ちにな

った。雲が動いて日の光が副管長の頭に射し込んだのだろうと思った。……しかし窓の外を見ると、驚いたことに、……町を覆う重苦しい黒雲には少しの切れ間もなく、日の光はどこからもさしていなかった。……スミス副管長の顔から輝き出ている光は、一体どこから来たものだったのだろう。私は、自分が現実^{まこと}に目にしたのは愛する指導者の顔を照らす聖きみたまの現われであったと確信している。……この出来事は、私の人生で最も神聖な経験のひとつとしてかけがえのないものになっている。」

スミス副管長を包んでいた光を目にしたのは、ゲイツ姉妹ひとりではありませんでした。部屋のもう一方の端に座っていたある長老は「黄色かあるいは金色がかった非常に明るい光」が、話をしているスミス副管長の周りに現われるのを見ました。

大管長会の3人の話がすべて終わった後、ウイلفォード・ウッドラフ大管長が「厚手の豪華なビロードで布張りされた台」にひざまずき、献堂の祈りを捧げました。「大管長はまるで50歳前後の人のような力強い祈りをされた。」デビッド・ジョンは当時86歳だった予言者が35分に及ぶ献堂の祈りを「眼鏡も掛けず、よどみなく」読み上げる様子をこう記しています。約50年前、ウッドラフ大管長の夢の中にプリ

たりは、広い部屋にいた私たちの頭上の空中を横切って北の窓へ移って行った。」

神殿の外にいた人々の中には「壮麗な光の輝きが神殿を取り囲み、いかにも神の住まわれる宮らしくその周りを包んでいる」のを目にした人もいました。

「天から地上に降りて行くようでした」

多くの会員にとって、献堂式が終わって神殿を後にすることは「天から地上に降りて行く」ようでした。トーマス・スライト兄弟は「天にいるような気持ちがなくならないように」願ったと書いています。多くの会員が同じ気持ちでした。彼らは家に戻ってから、人々と証を分かち合い、その経験を日記に記しました。

スライト兄弟は4月7日の献堂の祈りの間のことをこう書き記しています。「全員が〔祈りの言葉を読むジョセフ・F・スミス副管長と〕心をひとつにし、イエス・キリストのみ名によって大いなるエロヒムに謙遜に祈りを捧げた。私はまるで神のみ前に立っているかのように感じ、今までなかったほど敬虔な思いが胸に満ちた。」

十二使徒定員会のラジャー・クローン長老は、4月8日の夜、奥さんのリディア姉妹とともに献堂式が始まる

のを待っていました。この時、リディア姉妹が経験したことを、彼は次のように日記に記しています。「リディアの耳に、部屋の南東の隅の方からと思われる美しい歌声が聞こえてきた。最初はそこに聖歌隊がいるのかと思ったが、もちろんそんなことはなかった。彼女は歌声を2度耳にした。」

当時8歳だったアリス・ミネルバ・リチャーズ姉妹は、4月7日の献堂式の間「今まで聞いたことがないほどきれいな音楽が聞こえてきた……天使も見えた」と記しています。彼女は家に帰って、弟や妹たちにその経験を話しました。

悔い改めようという決意を新たにしてお神殿の献堂式を後にした会員もいました。乱暴者で知れ渡っていたある少年は「ウッドラフ大管長の頭の周りに明るい光の輪が輝いている」のを目にしました。彼は「神殿に注がれるみたまがあまりに強く心に迫ってきたので、家に帰ると、早速友達への接し方を改めた」と言っています。

「私にとってあの経験は、まさににしえの五旬節ごじゆんせつの出来事のようなだった(使徒2：1-18参照)」と、七十人第一定員会のB・H・ロバーツ長老は記しています。「主は私に、自分の内面、自分自身を見せてくださった。そして私は、自分がいかに荒削りで粗野な部分を持っているかがわかり、謙遜

にさせられ、真心から悔い改めたいという気持ちになった。」

あまりに美しく... あまりに汚れなき場所

1893年4月に行なわれたソルトレーク神殿の献堂はまさに清めの時でした。多くの人の生活が変わりました。福千年に至るまで風雪に耐えるよう建設された偉大な神殿は、建築に費やされた40年という歳月の間、数多くの聖徒たちに時間と財産と才能を犠牲にすることを求めてきました。天の御父は、そのような初期の聖徒たちの犠牲に対して霊的な祝福を豊かに注がれたのです。

「あまりに美しく、あまりに汚れなく、あまりに聖なる場所、天のみ使いが住まうにふさわしい所だと語る人々もいる。」アニー・ウェルズ・キャノン姉妹は、献堂式の行なわれた週に、そう書き記しました。

ソルトレーク神殿は、まさにそのような所なのです。□

作者——この話のために多くの資料を提供してくれたリチャード・N・ホルザップフェル兄弟に感謝しています。脚注(英文)を希望される方は、下記までご連絡ください。International Magazines, 50 East North Temple, Salt Lake City, Utah 84150 U.S.A.

信仰の光に導かれて 盲目のピアニスト、伊藤清兄弟

去る5月15日、町田ステーク部センター(東京都町田市)で伊藤清兄弟(大阪北ステーク部豊中第3ワード部所属)のピアノコンサートが開催された。伊藤兄弟は全盲のハンディを克服し、全国各地で演奏活動をしている。以下は、翌日の聖餐会で伊藤兄弟が語った、貴重な人生経験の一部である。



町田ステーク部センターでのコンサートの後、花束を贈られる伊藤清兄弟

私は大阪の非常に貧しい家に生まれました。ですから盲学校に行く時、弁当を持って行くことができませんでした。9、10歳といいますが、食べた上にもまだ食べたい年ごろです。そんなある日、私は空腹からクラスメートの机の中のパンを盗もうとしました。まさに手をつけたその瞬間、部屋に入ってきた先生に見つかってしまい、「コラッ」としかられました。体育館に連れて行かれて、水がいっぱい入ったバケツをふたつ持たされ、「立って反省しろ」と言われました。そこで立っていると非常に寒いんです。私は、かなり長い間立っていました。やがて用務員さんがやって来て、「何しているんだ」と言いました。私が訳を説明すると、彼は「その先生はもう帰ったよ」と言いました。

それからは、お昼時間になると空腹を忘れるために音楽室に行って、古い

ピアノをいじっていました。ある日、音楽の先生がやって来て、「あなたはお昼どきになるといつもピアノを弾いていますが、そんなにピアノが好きですか」と聞かれました。私は、「お弁当を持って来ませんから」と本当のことは言えず、「はい、好きです」と答えました。すると先生は、「それでは、私が教えてあげましょう」と言われました。それから、点字の楽譜の読み方を教わりました。

6年生のころ、私はひとりで学校に通っていました。私の親は、こういう体の人間を連れて歩くのは「いやだ、恥ずかしい」と言って、私をひとりで学校に行かせていました。目が見える子供には、目が見えない子供が、非常にこっけいに見えるようです。私が歩いていると、いろいろな所から石が飛んできました。ある時、私が、その石を避けながら歩いていますと、マンホ

ールに落ちてしまいました。それは深いマンホールでした。今でも覚えています。水が本当に冷たかったです。そんな私を助けてくれたのは、駐留軍のアメリカ人でした。その時、ひと言英語でお礼が言えたらどれほど良かったらうと思いましたが。でもその時は何も言えませんでした。

私は、この英語というものを、なんとか自分も勉強できないものだろうかといろいろ考えてみました。幸い私の家の近くには、英語を教える所がありましたので、そこへ何度も行って頼みました。しかし、いつも「目が見えない」という理由で、断られました。そこで思いついたのが、ラジオの英会話でした。私が英語を勉強する方法はもうこれしかないと思い、来る日も来る日も、もう本当に来る日も来る日も、ラジオの英会話を聞いて勉強しました。雑音の入るラジオでしたが、先生の言うことを一生懸命聞いて、それをそのまま、わかってはわからなくてもまねし続けました。そうしながら、少しずつ英語を覚えていきました。

小学校6年生の時、駐留軍のアメリカ人が私たちの学校を見学に来ました。その時少しピアノを弾きました。そのアメリカ人の中には、駐留軍のキャンプでオルガンを弾いている人がいて、中学校に入るのを待って毎週その人からオルガンを習うことになりました。彼は日本語がわかりません。私は英語がわかりません。ですから私が間違っていると、彼は私の背中をたたきました。そんな練習が続いて、ピアノとオルガンが弾けるようになっていきました。

15歳になった時、オルガンを教えてくれていた人のコンサートがあり、私も会場に行きました。すると彼は手に包帯をぐるぐる巻いて、「私はこんなけがをしたので、きょうはオルガンが弾けない。私の代わりにあなたが弾き

なさい」と言いました。私は言われたとおりに弾きました。私が演奏を終えると彼がやって来て、「良くやった」と握手をしてくれました。その時ふと気がつく、彼の手から先ほどまでしていた包帯が消えていました。あの包帯は、私に演奏させるための口実だったのです。コンサート会場からの帰り道、彼は電車の中で、私の演奏について英語でいろいろ教えてくれました。彼と私が英語で話し合っているのを見かけて、声をかけてきたのが、末日聖徒イエス・キリスト教会の宣教師たちでした。

オルガンの先生はその宣教師たちに、「この人があなたたちの教会で喜びが得られるのなら、喜びが得られるようにしてあげてほしい」と言っていました。宣教師たちは日本語で私に「いい所がありますよ」と、私の家から電車でひと駅の所にある教会を教えてくださいました。1950年7月23日のことでした。当時のMIA(相互発達協会)の集会に出席しました。そこへ行くと皆が私を歓迎して、握手もしてくれます。これは、生まれて初めての経験でした。その集会でも少しピアノを弾きました。間違えたり、つかえたりしながら演奏したにもかかわらず、皆が拍手をしてくれました。そんなことは初めてでした。しかも帰る時、私の切符まで買ってくれる人がいたのです。私は「こんな世界があるのか。これだったらいつ行ってもいいわ」と思いました。それから私は毎週教会へ行きました。そして「もし私がバプテスマを受けたら、いつもこういう扱いをしてもらえんだ」と思って、1951年3月24日、私はバプテスマを受けました。ですから私の場合、バプテスマを受けてから、ジョセフ・スミスのお話を聞いて、福音を学ぶことになったのです。

私の家は、父親があまり働かないのですから、とても貧乏でした。でも私には、「皆の前で拍手を受けられるような人間になりたい」という夢がありました。私が行っていた盲学校では、高校に入りますと、理療科とあんま科、音楽科があります。でも、私が音楽科に入るのを皆が反対しました。理由は、お金がかかること、そして、それまで

伊藤ご家族



人前で演奏ができるところまで上達した人がいなかったことでした。先生をはじめ皆が反対したのですが、私は初めてMIAに行ってピアノを弾いた時に聞いた拍手の音が、どうしても耳から消えなかったのです。お金をどうするかなど、何も考えずとにかく音楽科に入りました。

高校に入って初めての母の日に、母親にカーネーションをプレゼントしました。当時のお金で10円でした。私は母親が喜んでくれると思っていました。でも結果はその反対でした。「私を殺すんか」と言ってもものすごく怒るのです。よく聞いてみると、花屋の店員が間違えて、赤ではなく白いカーネーションをくれたのでした。そのために母親が「縁起でもない」と怒り出したのです。父親は少しでも興奮してくると、ご飯を食べていても、食卓をひっくり返します。そして、「どうして自分の子供だけがこうなんだ」と文句を言うのです。私はそばでそれを聞いているわけですから、それはもうたまりません。目が見えないとか、貧乏とか、外的な苦しみはまだ我慢できます。でも自分に一番身近な両親に否定される気持ちは、なんとも言えません。だんだん私の気持ちはすさんでいきました。

普通、高校は3年です。しかし私たちは、卒業するのに5年かかります。卒業する時になると、友達それぞれ、針治療院などへ行って働くと言います。しかし私には、どうすればいいのか、何の当てもありませんでした。音楽を

続けるにしても、家にはピアノがありません。私は気持ちばかりが焦り、だんだん思い詰めていきました。

ある日私は心の中で「もうこの家とお別れだ。父にも母にも、もう会うことはない」と決意して、寂しく家を出ました。天王子から南紀白浜へ向けて電車に乗り、ちょうど鉄橋にさしかかる音を聞いた時、私は窓を開けて、自分の体を窓の外に出そうとしました。その瞬間、ちょうど回って来た車掌に首ねっこを捕まえられ、「何するんや」と電車の中に引き戻されました。それから車掌室に連れて行かれ、こんこんと諭されました。そうするうちに、だんだんと自分でも目が覚めてきました。自分は教会に入って神様を知り、祈ったこともあったのに、何ということをしたのだらうと、信仰^{あかし}と証がよみがえってきました。車掌は「もし君がそのまま帰るんだったら、帰してあげます。でも私に反抗するんだったら、警察へ出します」と言いました。私は「もう帰ります」と約束し、おわびをして帰りました。

この時には、熱心に祈ったことを覚えていています。どうして自分はこういうことになってしまったのか。両親がどうあれ、友達がどうあれ、一体自分は何のために音楽の道に入ったのか。このことをもう一度考え直してみました。家にはピアノがなくても、学校のピアノを弾かせてもらえるように交渉することから始めてみようと思いました。「死んだつもりでやれば何でもできる。」私はこれを試してみようと思いを決しました。

2、3年たつて、現在の妻と結婚しました。それからピアノを続け、やがて人前で演奏する機会も増えてきました。

ある時、私は系図を出そうしましたが、どうしても父親の出身地である福井に住む伯父に手紙を書いて尋ねないとわからないことがありました。私が点字で書いて、妻にかなを振ってもらう形で手紙を出しました。伯父は、伊藤清という人間はもう死んだと思っていましたから、大変びっくりしました。

それから10年ほどたつた時、私たちのワード部から伝道に出て、福井で働

いている宣教師から電話がありました。用件は、福井でコンサートを開きたいということでした。私は福井の伯父に電話をかけ、「今度、コンサートでそちらへ行きます」と伝えました。すると伯父は、「忙しいからそんなものには行けない」と冷たく言って、電話を切ってしまいました。ところがコンサートの2日前に、今度は、福井の親戚の方から電話がかかってきました。伯父は「新聞にコンサートの案内が出ているが、これはあなたのことですか」と尋ねてきました。コンサートの日も会場も一致していたので、「多分それは私のコンサートでしょう」と言いました。

当日、福井の親戚は会場にやって来て、最前列に座っていました。演奏が終わった時、彼らは私に、「なぜ、あなたはこんなことができる人間なのに、今まで隠していたんですか。早速あなたのお父さんの霊前にご報告しましょう」と言いました。その時、私がこの教会に入って、兄弟姉妹から本当によくしてもらいながら生きていることを、親戚の人たちにわかってもらえたことがうれしく、大きな証になりました。

音楽を学ぶ時、点字の楽譜が非常に高いので困ります。一曲、一万円は超えます。私には、そんなお金はないです。でも、楽譜を持っている人から借りて勉強しています。また、妻が助けていろいろな楽譜を点字にしてくれます。1953年から現在まで、オルガニス

トの責任を受けていますが、妻が賛美歌の楽譜を点字に直してくれました。今はそれに加えて、ワード部で伝道の責任もいただいています。それだけではなく、これまで英語の勉強を続けてきたおかげで、教会幹部や会員、求道者のかたがたのために通訳をする機会もあります。特に、15年前に私たちのワード部でバプテスマ受けたアメリカ人の会員が帰国するまで通訳をさせていただいたことや、3年ほど前、扶助協会にも出席して通訳をさせていただいたひとりのアメリカ人の姉妹が、日本人の信仰に心を打たれたので伝道を決意したと言って帰国されたことなどは深く心に残っています。

さて20年ほど前、40歳の時、私にとって決定的なことがありました。大阪市から、「開眼手術を受けたい人は申し出てください。お金は、市の方で助成します」と言う知らせがありました。私は早速妻に内緒で申し込み、指定された病院へ行きました。私の診察は、200人ほどの希望者の中で一番最後でした。「伊藤さん」と呼ばれましたので、中に入りました。先生は、私の目をぐいっとむいただけで、何も言いません。しばらくして先生は、「家族はありますか。仕事はありますか。趣味はありますか。何か信心がありますか」と聞いてこられました。私が「信仰はあります」と答えると先生は、「ああ、そうですか。じゃあ……」と言って話し始めました。「あなたの目

は視神経がやられています。ですから、たとえアメリカとロシアが仲良くなる時が来るとしても、この目が治る時は来ません」と言いました。私はそれまで、「目さえ見えれば、こんな苦勞はしなくて済む。また、両親を満足させることもできる」という気持ちを長い間持って生きていました。しかしこの希望は、決定的に駄目になってしまいました。これは後で聞いたことですが、お医者さんから、私と同じような宣告を受けた人が、後ふたりいました。でもそのふたりは、相次いでこの世を去って行ったそうです。

この時から私は、神様と自分との関係について考えるようになりました。聖典のどこを見ても、それがなぜか見つかからないのです。「妙だな」と思って読んでいくうちに、大事なことをどうも忘れていたような気がしてきました。それは救いの計画でした。この最も基本的な救いの計画を見落し、「何のためにここに居るのか。次の世に行ったらどうなるのか」ということを、忘れていたような気がしました。

そこで、監督は神様の代理人ですから、監督のおっしゃることは、できなくても精いっぱい取り組もうと決意しました。「自分にはハンディがある」などと言ってはおられません。少し苦しいこともあります。それが使命であれば一生懸命行なおうと決心しました。

私は子供の時に、母親から、普通の人が受けるような称賛を受けたことがないのです。ですから人を褒めることも下手です。でも、今は家族がいます。もうすぐ伝道に出ようと、一生懸命勉強している息子もいます。私は子供が生まれてから、必ず妻に子供を褒めてもらうようにしました。いいところはどんどん褒めてもらいました。もちろん、悪いときにはお互い「ごめん」とあやまります。

確かにこの教会の教える福音のとおり生活したら、間違いなく心身ともに幸せになることができます。この教会は、神様の唯一の教会であることを証します。(レポーター：佐瀬正幸 町田ステーキ部独身成人評議会会長)



奥さんの好姉妹がタイプライターで点訳した賛美歌の楽譜(下)を左手で読み、右手の練習をする伊藤兄弟(左)。一方の手で楽譜を読み、もう一方の手でピアノを弾く練習を交互にした後に初めて両手で合わせて練習をするため、1曲が弾けるようになるまで相当時間がかかる。



広島ステークス部徳山ワード部



主の恵みと愛に感謝して

——祈りは聞き届けられました——

広島ステークス部徳山ワード部 松重光治



教 会堂の土地購入の契約に立ち会っていたケント・ギルバート兄弟を迎えて、1990年12月12日の夜、徳山ワード部でファイヤサイドが開かれました。100人を越える熱気の中で、長年の夢が実現したかのように、教会員一同互いに喜び合いました。しかし、それから献堂式を迎えるまでの2年間には、幾多の困難がありました。

建築許可を受けるためには、^{せいさん}聖餐会平均出席者数が一定数に達している必要があるのですが、土地購入の時点ではまだその条件を満たしていませんでした。早速、神権定員会や扶助協会の兄弟姉妹がお休み会員を訪問し、活発化を図りました。監督として、私は家族の協力を得て、月曜日と土曜日を除

き、お休み会員のお宅を訪問するようになりました。ある兄弟は、「教会堂ができることはすばらしいですね」と言って、時折出席されるようになりました。また、ある中学生の兄弟は、校庭を掃除している時、学校を訪問された定員会の兄弟に声をかけられ、再び活発に集われるようになりました。

出席者は徐々に増していきましたが、3カ月が過ぎても目標人数まで10人も足りません。懸命に働く会員の間不安が広がりました。そのような時、主は会員の祈りにこたえられ、祝福をくださいました。4月に2家族7人の転入があったのです。監督として転入があれば願っていただければ、主の恵みに心から感謝しました。

けれども、それから仕事の都合や病のために出席者数が減ることもあり、目標の人数に達するのは容易ではありませんでした。四半期ごとの活動報告書の時期が近づくと、安息日の朝、その日必要な出席者の数を祈り求め、断食して教会へ行くことが多くなりまし

た。そのようなある日、祈り求めた人数にふたり足りないで、主にふたりの人を送ってくださるようお願いすると、間もなくふたりの方が出席され、祈りが聞き届けられたことがありました。

こうして建築の条件は満たされたと会員一同安心していた時期に、ステークス部長から出席者の数がじゅうぶんではないと連絡があり、大きなショックを受けました。報告の期日が迫っており、無理のように思えたのです。しかし、最善を尽くそうと思い、定員会と扶助協会に連絡し、教会員に働きかけるようお願いしました。会員の必死の働きと祈りにより、次の安息日には80人を越える出席者があり、一同驚喜び合いました。

教会堂が建築されるに至るまでには相当の努力が必要でしたが、これらの経験によって、主のたぐいまれな力と深い愛を知り、兄弟姉妹の証と信仰が強められ、さらに、美しい教会堂が与えられたことに、言葉では言い尽くせない感謝の気持ちでいっぱいです。アジア北地域会長会第一副会長の韓仁相^{ハンインサン}長老の奉獻の祈りが真実となり、教会堂が常に主のみたまを感じる所となるように、これからも愛する教会員の皆さんと、主のみ業を頑張っていきたいと思います。(まつしげ・みつじ 監督)



広島ステーキ部
徳山ワード部

新教会堂 の 紹介

鉄骨造 3階建
敷地面積：295.93m²
建築面積：175.97m²
延床面積：491.98m²
完成日：1992年12月2日

所在地：山口県徳山市
緑町1丁目8
☎0834-22-0801

酒はもう一生飲むまい

——最後のビールは1本全部
飲みほすことができませんでした——

広島ステーキ部徳山ワード部 杉田裕三

予 定日より3カ月も早く、私たち夫婦に長男^{たつぎ}達^{たつぎ}が生まれたのは、1992年1月9日のことでした。夜中に救急車で病院に運ばれ、通常分娩ができず、妻が手術室に運ばれた際には、それまで信じるものが特になかった私も、ひたすら妻と子供の無事を神に祈りました。やがて生まれた達^{たつぎ}は、その後5カ月間入院生活を続けました。その間も必ずしも順調ではありませんでした。工作中に病院から電話があり、すぐ来るように言われた時は緊張し、神に祈りました。その時は、幸い私の血を輸血するだけで済みました。

それから数カ月が過ぎた11月のある日、カナダ人とアメリカ人の青年が我が家を訪れました。私は仕事でいなかったのですが、妻は子供の相手をしてくれる宣教師に好感を覚え、福音を学

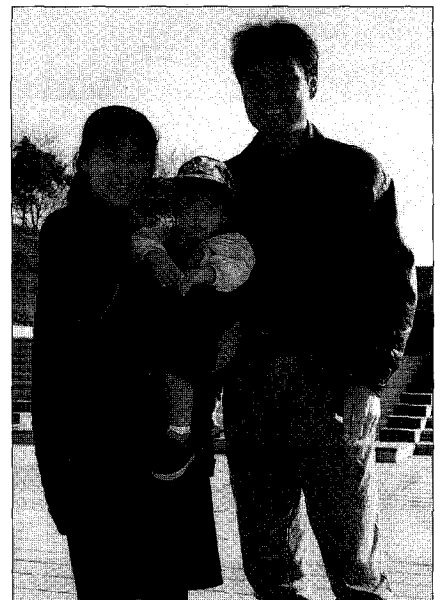
び始めました。学んだ内容に感動すると、その話を仕事から帰った私に話しました。家族の大切さ、イエス・キリストの教え、救いの計画など熱心に語る妻を見ていると、別に悪いことでもなさそうだと思いました。当時子育てからくるストレスのせいか、妻は少し怒りっぽくなっていたように思います。ところが福音を学ぶようになってから、不機嫌になることがほとんどなくなりました。ある時、たまたまささいなことで口論した挙げ句、最後に私が「つまらないことで、いつまでもゴチャゴチャ言うんじゃない！」と怒鳴ってしまったことがありました。妻はしばらくむっと黙っていましたが、やがて意を決したかのようにひと言、「ごめんなさい」と言いました。私は拍子抜けしてしまいました。こんなことは結婚

して約3年間で初めてでした。後でどうして素直に謝ったのか聞いてみると、「自分の主張を無理に通そうとしてあまり言いすぎるのは良くないし、仮にそうしても家族にとって何の得にもならない」という意味の返事が返ってきました。

妻はやがて、バプテスマを受けたいと思うようになりました。しかし妻の母はある宗教団体に属しており、妻も一応そこに籍を置いていたため、猛反対に遭いました。やむなくバプテスマは保留となりました。妻はそれでもあきらめずに、作戦を練りました。「家長である夫が改宗すれば妻である自分が従うのは自然であるから、反対されないだろう」というものでした。私は、この教会の教えについては悪いものではないことを、妻から聞いてすでに知っていました。バプテスマをすぐに受けるつもりはありませんでしたが、宣教師に話して、私も福音を学ぶようになりました。

最初の日、宣教師が私たちの部屋にきた時、何か部屋の空気が違うように感じました。救いの計画について聞いていると、みたまを受けて思わず涙が出そうになり、宣教師に見られるのが恥ずかしくて一生懸命こらえました。それから福音を学ぶのがとても楽しみになりました。

ところがやがて知恵の言葉に関して



杉田ご家族

教えを受ける日が来ました。そのころ毎日のようにビールを飲むのを楽しみにしていた私は、とても無理だと思いました。宣教師は、とにかく始めてみるようにとチャレンジをします。私はまあ無理だろうと思いつつも、最近毎日飲んでいることだ少し試してみるか、といった軽い気持ちで始めました。ところが次の日から毎日、宣教師から電話がかかってくるようになりました。「知恵の言葉、頑張ってください。」そうなるどころも飲むわけにもいきません。最初の2、3日は飲まないことが非常に苦痛でしたが、彼らと電話で話すことで癒されました。1週間過ぎると苦痛はなくなり、頭もスッキリし、以前より体調も良くなったように思えました。後で聞いた話ですが、この期間宣教師たちは毎晩電話をするだけでなく、私のために祈り、私の苦痛を理解するため断食をして、私を助けてくれていたのです。

禁酒を始めて2週間くらいたった時、「もう一生飲むまい」と決心がつかしました。ただ、最後にビールを1本だけ、と思って飲みました。けれども1本全部は飲めませんでした。すぐに酔ってしまって、気分が悪くなりました。ビールが自分の体にとって良いものでないと、改めて知りました。

1992年4月12日、私と妻はともに茨城県のつくばワード部でバプテスマを受けました。そして2カ月後に転勤のために山口県の徳山ワード部に転入し、現在に至っています。

この教会を知り、改宗するために多大な励ましや助けをくれた宣教師に心から感謝しています。また、つくばワード部ならびに徳山ワード部の教会員の皆さんに感謝しています。主の教えに従って生活することはとても大切であり、実際にそうするとき家族のきずなが強まることを証します。(すぎた・ゆうぞう 長老定員会第二副会長)

め、背負った借金をいかに返済し、事業を軌道にのせるかをすべてに優先させ、神様よりも仕事を愛し、富に仕える毎日を送っていました。仕事面で、サラリーマン生活では得られなかった経験や知識を商売を通して得た反面、信仰面で失ったものの大きさは、その時はまったく認識できませんでした。

7年の月日が過ぎ、3年前のある日、街で徳山ワード部のある姉妹と偶然出会いました。それと前後して、監督がホームティーチャーとして我が家を探して、何度もわざわざ訪問してくださいました。教会を遠ざかっていた時期に転居したために、住所がわからなくなって私を、監督はこつこつと暇をみても捜してくださいました。これをきっかけに、私は真剣に教会へ戻るための努力を始めました。確固とした信仰や証もないままバプテスマを受けたうえに、徳山に移って7年間はまったく教会からも離れていたのですから、ほとんどすべてを一からやり直さなければなりません。けれどもすべては自分自身の選びにほかならないと痛感した時、「人は自分のまいたものを、刈り取ることになる」(ガラテヤ6：7)という聖句が身にしみました。私が教会を離れていた時期に手を差し伸べてくれた姉妹やホームティーチャーの助けに、今も心から感謝しています。

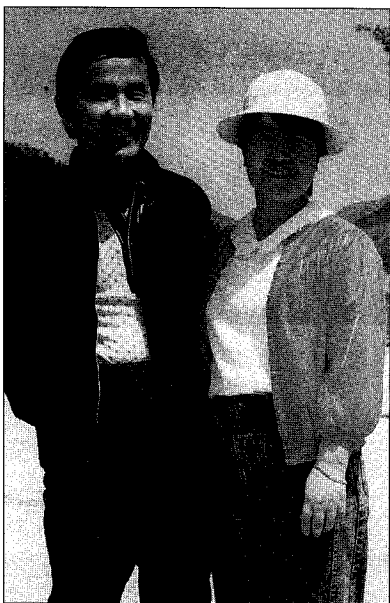
教会に活発に集うようになってからは、自分なりにそれまでの遅れを取り戻そうと頑張りました。福音を学び、責任を果たそうと努力しました。今、いろいろな責任を通して働くときに、自分はイエス・キリストとつながっていないと何もできない存在であることを痛感しています。(ヨハネ15：5参照)

徳山ワード部では、教会活動から遠ざかっている長老や長老見込み会員の方が多く、今、彼らに対するホームティーチングの中で私自身の経験から得たものを生かそうと試みています。現在私は、教会から足が遠のいている方ばかりを、宣教師を同僚にして訪問する責任をいただき、定期的に訪問を続けています。全員が教会活動から遠ざかっている家族の場合には、必要を満

「あなたが立ち直ったときには、兄弟たちを力づけてやりなさい」

—ホームティーチャーのおかげで再び教会へ—

広島ステーキ部徳山ワード部 副島喜寿



副島ご夫妻

私の住む山口県徳山市に建てられた広島ステーキ部徳山ワード部の新しい教会堂は、昨年12月13日に、アジア北地域会長会第一副会長の韓仁相長老によって献堂されました。今、新しい教会堂で集会を持てる祝福を感じています。

12年前、30歳の時に私は広島市で教会を知り、バプテスマを受けました。当時は漠然とした単なる受身の信仰であったために証もなく、種まきのたとえ話の中の「石地にまかれた種」(マタイ13：5-6、20-21参照)のように、根がないためにしばらくすると枯れ、2年後には教会活動からまったく離れてしまいました。

そのころ広島から徳山市に移り住み、新規に飲食店を開業しました。そのた

たしたり、変化を持たせたりするため、長老と訪問することもあれば、姉妹宣教師と訪問することもあります。

教会から足が遠のいている方にとっては、ホームティーチャーや訪問教師が教会との唯一の接点である場合が多いのではないのでしょうか。今、ホームティーチャーとして彼らを訪問するとき、かつては訪問される立場にあった私が、ホームティーチングによって救われたことを思い出します。当時のホームティーチャーのイエス・キリストの模範に倣った愛ある助けを思うとき、

主がペテロに与えられた「あなたが立ち直ったときには、兄弟たちを力づけてやりなさい」(ルカ22:32)というみ言葉が自然に頭に浮かんできます。たとえすぐに目に見える効果が現われなくても、この聖句を忘れずに愛と関心を示し、召しを果たしたいと願っています。ホームティーチャーはまことに主の代理人であり、監督と定員会の代表者であり、家族を強く守護する偉大な召しを受けていることを証します。(そえじま・よしひさ ワード部長 老定員会会長)

けないとわかっていても、体が負けてしまうのです。そういうときでも、父は一生懸命にレッスンを続けてくれました。本当に感謝しています。

セミナーでたくさんの聖句を学んでいくうちに、祈りの大切さを知りました。モルモン経には、祈りについてたくさん書かれています。その多くの聖句が、私を励ましてくれました。

モルモン経のセミナーが終わり、高校の入学試験が近づいてきました。私にとって、とても大きな難関でした。しかしセミナーで学んだ事柄を思い出して、実行に移しました。それは主に祈り求めることでした。私は勉強がよく理解できるように、勉強を始める前に祈ることに決めました。すると苦手だった数学が、少しずつですが、だんだんと理解できるようになりました。さらに祈りを実行に移すことによって、自分の信仰が強められるのを感じました。そして家族の協力をはじめ、多くの人々の助けもあり、希望の高校へ入学することができました。

このことを通して私は、神様が生きていらっしゃる、モルモン経が真実であるという強い証を得ることができました。そして、セミナーで学ぶことの大切さを知りました。このようにすばらしい教義を学ぶ機会があることを感謝しています。この教会が真実の教会であることを証します。(もりしげ・りょうこ ワード部音楽指揮者)

実行によって強められた信仰

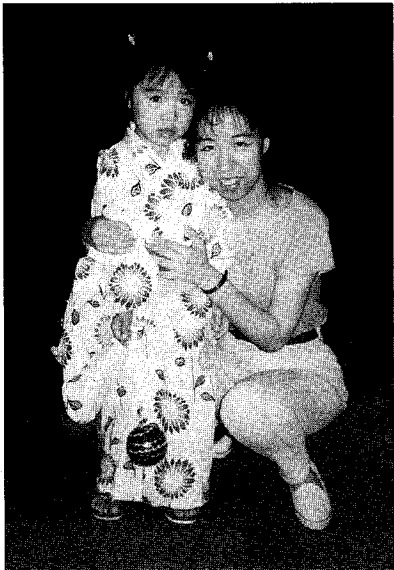
——セミナーで学んだとおり、祈り求めました——

広島ステーキ部徳山ワード部 森重良子



今まで私はたくさんの祝福を受けられました。中でも大きな祝福は、セミナーで学んできたことです。

中学校3年生から始めて、今年3年目に入りました。1年目にはモルモン経を学びましたが、中学校3年生で高校受験を控えていたので、ときにはつらいこともありました。しかしこの年、私はセミナーを通して多くの事柄を学び、証を得ることができました。レッスンは父から受けました。早朝のせいもあり、私は何度もレッスンの間に眠ってしまったり、集中していなかったりすることがありました。頭ではい



大原真紀姉妹と娘さんの侑乃ちゃん

「幸福って何？」

——子供の時から求めていた幸福を福音の中に見いだしました——

広島ステーキ部徳山ワード部 大原真紀

物心ついたころから、私は「どうして生まれてきたのだろう」とよく考えていました。でもその問いに対する答えは見つからず、目標もなかつただ漠然と毎日を生きていました。

19歳の時に12歳年上の夫と結婚しま

したが、夫は仕事が忙しくてほとんど家にいないため、子供とふたりで寂しい日々を送っていました。ある日、友人から「英会話に言ってみない？ 侑乃ちゃんも一緒に」と誘われて、初めて教会に行きました。しばらくして、

姉妹宣教師から福音を学び始め、夫は反対していましたが、勉強を続けてバプテスマを受ける目標も立てました。そのころ私は看護学校へ入学し、学校の勉強や家事に追われて身辺が忙しくなり、だんだんと教会から離れていきました。

2年後、念願の看護婦として働いていましたが、満たされていないという気持ちは以前と変わりませんでした。「自分には何が足りないのだろうか。何を求めているのだろうか？」私は自問自答を続けました。何か月も考え続け、やっと気づいた答えはこうでした。「私は幸福になろうとしていなかったのだ。」

「幸福って何？ 何なのだろう。26年間生きてきて、こんなに身近にある簡単な言葉に初めて気づくなんて！」

その時、もう一度教会へ行きたい、と心から思いました。私には子供がいませんでしたが、いつも独りぼっちだと思っていました。頼るべきものもありませんでした。

この福音を学んでいくうちに、私たちが神様の子供であり、戒めに忠実に生活するならばいつか一緒に暮らせることを知りました。また、神様は私たちを愛してくださっており、苦しみのときも、悲しみのときも、喜びのときも見守ってくださっていることを知った

時に幸福だと思いました。初めて福音を学んでからバプテスマを受けるまでに3年という年月を要しましたが、私にとって本当の幸福を知るために必要な年月だったと思います。

まだ新しく生まれ変わったばかりです。これからたくさんの方を学び、成長していかななくてはなりません。けれども、確かに天父とイエス・キリストが生きておられ、私たちを愛してくださっていることを知っています。そして私もこのおふた方を心から愛しています。これからは真理を見失うことのないように願っています。(おはら・まき ワード部扶助協会書記兼会計係補助)

私の人生を変えた出会い

——ひとりの姉妹との文通を通して、福音を知りました——

東京北伝道部長野地方部諏訪支部
宮澤美佐子

5年前の3月、私は東京大崎にある治療院で骨盤の調整をしてもらうために、埼玉県越谷市に住むいとこの家に、2週間の約束で泊まっていました。いとこは快く泊めてくれましたが、ふたりの子供の世話に手がかかり、特に下の子はまだ乳飲み子だったので、私は気を遣いすぎてなんとなく居場所がないような、複雑な気持ちがあり、最後には悲しくなっていました。

当時私は18歳で、高校の卒業を迎えようとしていました。しかし、高校2年のころからだんだんひどくなっていた偏頭痛や体調の悪さなどがさらに悪化し、肉体はおろか精神的にも弱くなってしまい、進学也希望も持てず、高校の卒業式にも出席できないような状態でした。脳外科、内科などありとあらゆる病院に行ってみましたが、どこも悪いところはないと診断されて、ただ月日だけが過ぎていました。涙が出

てくるばかりで、「自分は一体これからどうなるのか。この体の苦痛は癒されるのだろうか。こんなにつらくて痛いのにどこも悪くないなんておかしい。だれも私の痛みや苦しみをわかってくれないんだ」と絶望の底に沈み、いつも死にたいとばかり考えていました。しかし不思議と死ぬことはできませんでした。

その月の初め、母が書店で1冊の本を買ってきました。その本には、骨盤のずれによって起こるさまざまな症状は、矯正をすることによって治ると書かれてあり、母は最後の手段だと思ったのでした。私は母に連れられてすぐに東京の大崎にある治療院に出かけて行きました。やはり右の骨盤が上にずれており、そのずれによって背骨や首の骨がゆがんで神経を圧迫しているために、偏頭痛や胸の圧迫感、食欲不振、微熱が続くなどの症状があったのだと

言われました。そこで長野県ちいさな小県郡にある実家にいったん帰り準備をし、いところを頼って上京したのでした。

3月18日、私は東京での最後の治療を受けようと治療院を訪れました。それ以後は、たとえ1日ばかりでも家から通える、長野県諏訪市の治療院に移ろうと考えていたからです。そのためには紹介状が必要で、治療の後に面接を受けることになっていました。

最後の治療もいつもどおり、まず腰を回して矯正する機械の上にうつ伏せになっていました。そばでも同じようにふたり、中年の女性が同じ治療を受けています。その時、ひとりの女性が気持ちよく私たちにあいさつをして、空いている機械に乗りました。私にはその行為がとても印象的でした。私はいつも周りの人に気持ちよくあいさつをしたいと思っていましたが、恥ずかしがり屋で、なかなかできなかったからです。「本当にすごい。私もあのようになりたい。あの女性と話をして、できるならお友達になりたい」と強く思いました。

幸いなことに、骨盤の調整の後で先生の間診を受けに行くと、先ほどの女性が座っています。その女性も間診を受けようとしていたのです。私はとてもうれしくなって、思わず話しかけて

しまいました。その女性はびっくりした表情をしながらも、話しかけにに応じてくれました。帰りも大崎駅まで一緒に行くことになり、話しているうちに、その「お姉さん」がクリスチャンであるとわかりました。私は、宗教に対してあまりよい感情を抱いていなかったのので少し「いやだな」と思いましたが、その気持ちよりも、「お姉さんとお友達になりたい」という気持ちの方が強く、不思議にも、「彼女は私にとって大切な人だ」という気持ちがいつの間にか、とても強く心に浮かんでいました。駅でアドレス帳を開いて教会の名前を見せてくれたのですが、その時、私は眼鏡を掛けていたものの眼精疲労のためか、文字が見えませんでした。切符を買う前に、彼女は住所を教えてくださいました。

実家に帰るとすぐに、岩手に住むお姉さんに手紙を書きました。進学校を卒業してどの大学へ行くのかという、私の状態を正しく理解してくれない周りの人々からのプレッシャーや、諏訪へ一日がかりで治療に行き、涙ながらに暮らす毎日もあったこと。私はこれからどうなるのだろう、このまま、人と話したり、再び勉強したり、物事を覚えたり、働いたり、結婚したりすることもできないのだろうかという不安。大学に進学できた友人がとても輝いて見ると同時に、うらめしく思えるこ

と。暗やみのどん底に落ち込んでなんの希望もなく、将来の見通しもまったく立たない、この先、生きていけるのかどうかさえもわからない自分の状態など。私はこのようなもろもろの感情を彼女に書きつづりました。彼女は私の置かれている状況をそのまま受け入れ、私の抱えている苦痛をそのまま理解し、慰めてくれました。ほかの人はだれも理解してくれなかった体の痛みや不調を、じゅうぶんなほどに理解し、いたわってくれました。それは彼女もまた、私と同じような体の痛みをもっていたからなのです。お姉さんとの文通は、心身ともに疲れ果てていた私の心に一条の光をもたらし、少しずつ癒してくれました。やがて彼女は、人を受け入れることができなくなっていた当時の私にとって、心から信頼したいと望む人になりました。

彼女の手紙には最初から、自分がクリスチャンであり、いろいろ大変なこともあるけれど、今とても幸せに暮らしていると書いてありました。つまり証^{あかし}を書き、私にもその幸せを得る道を開いてくれたのでした。「美佐子ちゃん、人生はもちろん長いけれど、一番大切なのは、どうして自分が生きているかを知ることだと思いますよ。そうすればもっともっと充実した人生が送れると思います。ただなんとなく生まれてきて、なんとなく死んでしまうなんて悲しいもの。」私は人生には目的があるのか、と思いました。しかし、それを探求していくための力はまだありませんでした。

神様に興味を持った私に、3通目の手紙と一緒に「回復された真理」と「ファミリー」というカセットテープが送られてきました。そのころ外界からの刺激を一切受け付けられなくなっていた私は、カセットテープを聞くことはできませんでしたが、送られてきた本はなんとか読み終えたいと望みました。耳からの刺激だけでなく、たとえ5分の間本を読むことでさえも、私の体には大変な負担がかかったのです。諏訪に治療に出かけるときに持っていく、列車の中で少しずつ読んでいきました。初めてジョセフ・スミスが祈りによって受けた「最初の示現」につい

て知った時は、その意義と偉大さがじゅうぶんにわからなかったものの、「やっぱり神さまはいらっしゃったのだ」と思いました。やがて、読みたいと望んでいた「モルモン経」も、長野支部の姉妹宣教師たちに送ってもらい、少しずつ読み始めました。

彼女と何度も手紙のやりとりをしているうちに、小さいころから心の奥深くに感じていたように、神様が本当にいらっしゃり、私のことも見守ってくださっているのだという気持ちが以前よりも強くなり、自分は神様の子供なのだということもおぼろげながら理解できるようになりました。それからはイエス・キリスト様のみ名によって、永遠の父なる神様に祈ることを覚えました。手紙の中で祈りの仕方を教えてもらったからです。いつでも困ったことがあると神様に祈りました。今でもよく覚えています。飼っていた子猫が2匹いなくなってしまった時にも、祈りはこたえられ、子猫は無事に帰ってきました。戻ってきた子猫を抱いて、大粒の涙を流しながら、何度も「神様ありがとう」と天を仰いで言いました。この経験によって、神様がどんなささいなことでも祈りを聞いてこたえてくださるという証を得、神様に全信頼を寄せてもよいのだと少しずつわかってきました。

翌年4月、恵まれて諏訪の近くの町にある短期大学に進学することができました。でも私は物事を再び暗記したり、友達を作ったり、学校に通ったりすることができるだろうかと不安でした。ただここでも祈りを通して、多くの導きと慰めを得ることができたのです。

短大に入学した1989年の6月ごろより、諏訪支部の宣教師から福音を学び始めました。以前に手紙の中に書いてあった、宣教師が話してくれる「6つの話」にとっても興味を持った私は、春には宣教師から福音を学ぶこととお姉さんと約束していたのです。長野支部の姉妹宣教師からいただいたモルモン経の表紙の裏に証を書いていたご家族に連絡を取ることによって、諏訪支部の女性の会員の方の助けも受けられました。その方はおなかに赤ちゃんがい



福音を伝えてくれた斎藤郁姉妹の結婚を祝う
宮澤美佐子姉妹(前列右)

たにもかかわらず、私が宣教師に会う時にはいつも来てそばにいてくださったおかげで、安心して福音を学ぶことができました。

宣教師から詳しく福音を聞いていき、死者のためのバプテスマのお話を聞いた時にそれまでいろいろ迷っていたのですが、決心し、1989年10月15日の安息日にバプテスマを受けました。私の人生の新たなスタートでした。

あれから4年が過ぎました。私は、天のお父様やイエス様の助けがあって、長野県公立小中学校教員採用試験に合格し、短大を卒業後、中学校の英語教諭として勤務しています。

日々、さまざまなチャレンジや試練に遭い、落胆するときもありますが、主を堅く信じて生きていこうと思います。私は神様の娘であり、この試しの生涯の後、また再び神様のみとに戻るためには今全力で神様にお会いする準備をしなくてはいけないのだと知っています。天のお父様が^{さいとうりく}斎藤郁姉妹と会わせてくださったことに心から感謝しています。彼女は私のことを実の妹のように思ってくれ、私もまた彼女を実の姉のように思っています。彼女との出会いが私の人生に福音の光を与え、奇跡をもたらしてくれました。生きる目的と本当の幸福を教えてくれたのです。(みやざわ・みさこ 支部扶助協会教育担当副会長)

短歌

福岡伝道部鹿兒島地方部鹿兒島支部
四元通子

馴染みなる なは号寝台車輪の音
はずむ思いで 神殿へ向かう

家族して 共に入れる神殿で
これまでの道 振り返りうなづく

愛ありて 何をするにも疲れなし
霊が肉体を 支配するとき

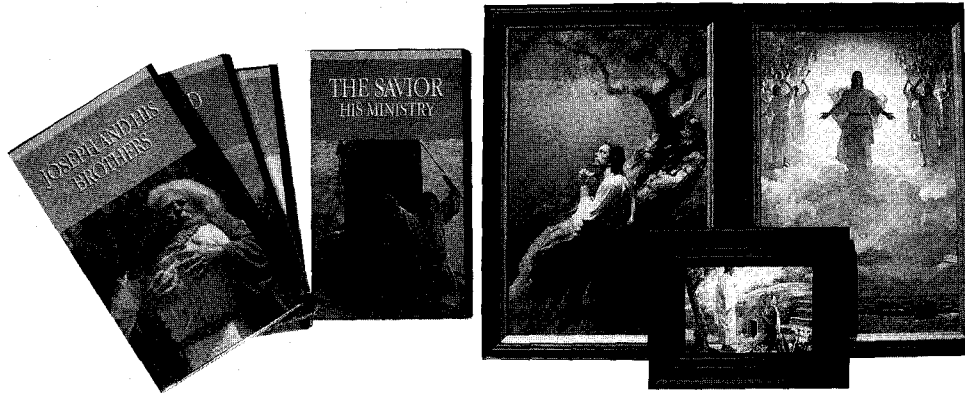
このわれを ささえ励ましてくれた人
永遠の友として 失い難し

ブックセンターからのお知らせ

輸入商品の価格改定

以下のとおり配送センターおよびブックセンターで取り扱う輸入商品の価格が改定されました。ご注文の際にはご注意ください。

なお、ブックセンターのみの取り扱い商品と、一般カリキュラム資料などの取り寄せ(輸入)が必要な商品については、配送センターあるいはブックセンターまで直接お問い合わせください。



ビデオカセット(6巻)

額入り絵画(14種)

カタログ番号	品目	現行価格	改定価格
一 般			
30912	聖書(中型、英語)黒	¥2,000	¥1,100
30913	聖書(中型、英語)茶	¥2,000	¥1,100
30920	末日聖典合本(英語)黒	¥1,300	¥750
30921	末日聖典合本(英語)茶	¥1,300	¥750
86221	四大聖典合本(英語)茶	¥6,500	¥5,500
86222	四大聖典合本(英語)赤	¥6,500	¥5,500
30923	モルモン経(英語)ソフトカバー	¥400	¥200
33571 002	モルモン経(スペイン語)	¥400	¥250
33571 059	モルモン経(ポルトガル語)	¥400	¥250
33571 320	モルモン経(韓国語)	¥450	¥250
33572 265	モルモン経(中国語)ソフトカバー	¥400	¥250
30924	教義と聖約/高価なる真珠(英語)	¥300	¥200
33567 002	教義と聖約/高価なる真珠(スペイン語)	¥300	¥250
33573 059	教義と聖約/高価なる真珠(ポルトガル語)	¥300	¥250
33567 320	教義と聖約/高価なる真珠(韓国語)	¥300	¥250
33573 265	教義と聖約/高価なる真珠(中国語)	¥300	¥250
52047	モルモン経カセットテープ(英語)	¥2,600	¥2,100
52212	教義と聖約/高価なる真珠カセットテープ(英語)	¥1,800	¥1,400
33610	聖書の地(英語)	¥1,400	¥1,200
80032	四大聖典カバー(合成皮革)黒	¥1,300	¥1,100
80033	四大聖典カバー(合成皮革)茶	¥1,300	¥1,100
80051	四大聖典カバー(合成皮革)エンジ	¥1,300	¥1,100
80052	四大聖典カバー(合成皮革)白	¥1,300	¥1,100
80053	四大聖典カバー(合成皮革)青	¥1,300	¥1,100
80039	四大聖典カバー(コンビ)灰色	¥2,000	¥1,750
80041	四大聖典カバー(コンビ)青	¥2,000	¥1,750
80043	四大聖典カバー(コンビ)黒	¥2,000	¥1,750
80045	四大聖典カバー(コンビ)こげ茶	¥2,000	¥1,750
80047	四大聖典カバー(コンビ)紺	¥2,000	¥1,750

役員の変動

1993年7月29日から1993年9月27日までに管理本部会員統計記録課に通知のあった役員の変動(敬称略)

- 仙台伝道部青森地方部八戸支部
新支部長：窪田耕治
(前任者：今野稔, 7月31日八戸湊支部と合併)
- 仙台伝道部青森地方部三沢支部
新支部長：中居弘伸
(前任者：竹内賢次)
- 仙台伝道部盛岡地方部盛岡支部
新支部長：古川盛悦
(前任者：星野正司)
- 東京南ステークス部東京第1ワード部
(英語)
新監督：Franz Kelsch
(前任者：Stephen Bigelow Gasser)
- 横浜ステークス部上大岡ワード部
新監督：高川星詩
(前任者：渋谷敏)
- 横浜ステークス部小杉支部
新支部長：岩田克樹
(前任者：能美知威)
- 大阪堺ステークス部河内長野ワード部
新監督：志野年昭
(前任者：京谷隆)
- 岡山ステークス部福山支部
新支部長：那須宇暢
(前任者：中野哲理)
- 福岡伝道部熊本地方部長嶺支部
新支部長：青木勝洋
(前任者：角屋光典)

カタログ番号	品目	現行価格	改定価格
	初等協会, 若い女性, 若い男性		
31362	CTRリング	¥150	¥70
31369	福音の実践ペンダント	¥400	¥350
31373	福音の実践賞えりピン	¥400	¥350
31463	セゴ百合ブローチ(12金)	¥1,000	¥750
32553	若い女性のメダル	¥1,650	¥1,200
32554	若い女性ビーハイブ確認証ペンダント(チェーン付き)	¥1,250	¥1,000
32555	若い女性マイアメイド確認証ペンダント(チェーン付き)	¥1,250	¥1,000
32556	若い女性ローレル確認証ペンダント(チェーン付き)	¥1,250	¥1,000
32557	若い女性ロゴペンダント(チェーン付き)	¥700	¥550
32558	若い女性ロゴえりピン	¥200	¥150
32817	義務達成賞バッジ(リボン付き)	¥900	¥650
32818	義務達成賞タイタック/えり章	¥400	¥450
32820	名誉賞バッジ(リボン付き)	¥900	¥650
80632	ネックチェーン	¥500	¥350
	音楽		
31238	ピアノ用賛美歌前奏曲	¥300	¥150
31243	賛美歌(英語)	¥750	¥450
50003	モルモンタバナクル賛美歌CD(英語)	¥1,600	¥1,250
52003	モルモンタバナクル賛美歌カセットテープ(英語)	¥1,200	¥900
52175	賛美歌カセットテープ 歌入り(英語)	¥2,500	¥1,700
52297	賛美歌カセットテープ 伴奏のみ	¥2,500	¥1,700
80845	タバナクル合唱団CD 聖き贖い主(英語)	¥1,200	¥1,000
80846	タバナクル合唱団カセットテープ 聖き贖い主(英語)	¥800	¥700
	ビデオカセット		
53150	天地創造/アブラハム(創世1-22) VHS(英語)	¥2,000	¥1,700
53151	イサクとヤコブ(創世23-25) VHS(英語)	¥2,000	¥1,700
53152	ヨセフと兄弟たち(創世37-50) VHS(英語)	¥2,000	¥1,700
53163	救い主: 初期の時代(ルカ1-8) VHS(英語)	¥2,000	¥1,700
53164	救い主: 伝道の時(ルカ8-17) VHS(英語)	¥2,000	¥1,700
53165	救い主: 十字架と復活(ルカ18-24) VHS(英語)	¥2,000	¥1,700
	絵画, 視覚資料		
80215	額入り絵画 主イエス・キリスト(中型)	¥1,100	¥1,050
80217	額入り絵画 主イエス・キリスト(小型)	¥700	¥600
80387	額入り絵画 キリストと子供たち(大型)	¥1,500	¥1,200
80239	額入り絵画 キリストと子供たち(中型)	¥1,200	¥1,000
80258	額入り絵画 マンタイ神殿	¥1,000	¥850
80261	額入り絵画 ソルトレーク神殿 夜景	¥1,000	¥850
80276	額入り絵画 ソルトレーク神殿 冬景色	¥1,000	¥850
80279	額入り絵画 ジョセフ・スミス	¥1,000	¥850
80283	額入り絵画 ワシントン神殿 夕暮れ	¥1,000	¥850
80288	額入り絵画 マリヤと復活された主	¥1,000	¥850
80389	額入り絵画 ゲツセマネの祈り(大型)	¥1,500	¥1,200
80613	額入り絵画 ゲツセマネの祈り(中型)	¥1,000	¥850
80396	額入り絵画 再臨	¥1,500	¥1,200
80726	額入り絵画 イエスのバプテスマ	¥1,000	¥850
86251 300	初等協会視覚資料切抜きセット	¥2,500	¥2,300
	その他		
31235	宣教師ガイドパッケージ(英語)	¥1,200	¥700
80542	聖餐カップ(プラスチック, 8,000個入り)	¥4,000	¥3,300
80571	聖餐カップ(紙, 250個入り)	¥250	¥150
80547	聖餐トレイ(パン用)	¥1,500	¥1,150
80550	聖餐トレイ(水用)	¥2,500	¥1,700

9月に召された専任宣教師

第170期生17人



後列左から1-5, 中列左から6-11, 前列左から12-17

- 〈名前〉
1. 平野修久
 2. 石田重幸
 3. 富岡利之
 4. 佐久間道之
 5. 黄木拓也
 6. 小口裕子
 7. 成見昌子
 8. 高井一嘉
 9. 松岡一彦
 10. 軽部広明
 11. 塩谷征士
 12. 高吉美和
 13. 深田菜穂子
 14. 永田葉子
 15. 青木弥生子
 16. 旗本恵美
 17. 雇地七枝

- 〈出身地〉
1. 東京東S/長生W
 2. 名古屋西S/御器所W
 3. 東京東S/鎌ヶ谷W
 4. 札幌西S/新琴似W
 5. 町田S/町田第2W
 6. 町田S/厚木W
 7. 仙台M/秋田D/秋田B
 8. 東京東S/千葉W
 9. 大阪S/東大阪W
 10. 仙台S/山形W
 11. 東京南S/渋谷W
 12. 大阪堺S/三国ヶ丘W
 13. 京都S/彦根W
 14. 高崎S/熊谷W
 15. 高崎S/熊谷W
 16. 札幌S/札幌東W
 17. 仙台M/青森D/三沢B

- 〈伝道地〉
1. 福岡伝道部
 2. 東京北伝道部
 3. 神戸伝道部
 4. 東京北伝道部
 5. 名古屋伝道部
 6. 神戸伝道部
 7. 福岡伝道部
 8. 神戸伝道部
 9. 東京北伝道部
 10. 岡山伝道部
 11. 沖縄伝道部
 12. 仙台伝道部
 13. 仙台伝道部
 14. 神戸伝道部
 15. 札幌伝道部
 16. 東京南伝道部
 17. 東京北伝道部

M: 伝道部, S: スターキ部, D: 地方部, W: ワード部, B: 支部

皆さんの原稿を募集しています

▶ローカルページでは皆さんの原稿を募集しています。以下のような証をお送りください。

- ①どのようないきさつで改宗したか。
- ②日々の生活に福音の原則をどのように応用しているか。またそれによってどのような祝福があったか。
- ③教会員として職場でどのような努力をしているか。また、信仰をどのように生かしているか。
- ④友人や周囲の人にどのように福音を伝えているか。
- ⑤伝道に出るに当たりどのように準備し、障害を克服したか。また、専任宣教師になって得た証。
- ⑥神殿参入や家族の記録を作成するに当たってどのような助けや祝福があったか。
- ⑦家庭の夕べの紹介。
- ⑧その他。(家族の証, ワード部/支部特集など)

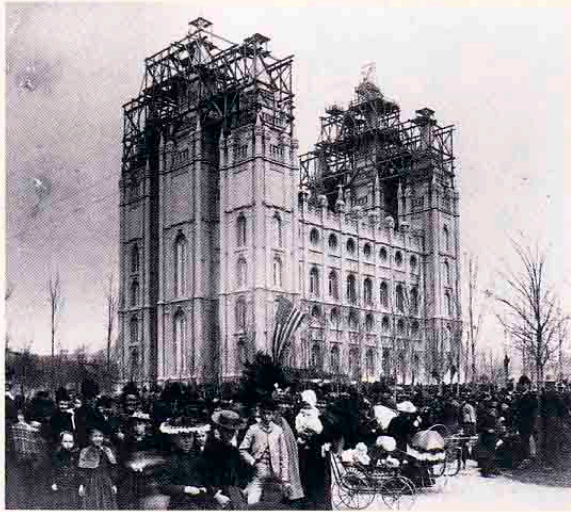
▶現在ローカルページでは証の著者の生年を記載しておりませんが、編集作業の参考のため、投稿の際には連絡先(住所、電話番号)、教会での責任(役職名)、所属ユニット名と併せて生年を記入し、写真を同封のうえお送りください。

▶お送りいただいた原稿は一部手直しさせていただくことがあります。また、掲載されるまでには若干時間がかかる場合もありますので、あらかじめご了承ください。

▶あて先: ☎106 東京都港区南麻布5-10-30 末日聖徒イエス・キリスト教会「聖徒の道」編集室
電話03(3440)2666
ファクシミリ03(3440)3275



「1885年、大通りからの景観」 アール・ラウソン画
画家アール・ラウソンは近年の作品の中で、ソルトレーク神殿(右)が完成に近づいていた当時の街の様子を想像して描いた。
雪に覆われたワサッチ山脈が、市の東端にそびえている。



ソルトレーク神殿は、100年間にわたって美の傑作、力の象徴、平和の家、啓示の場、神の宮居として存立してきた。今月号には建築や献堂など、ソルトレーク神殿の特集記事が掲載されている。

